

団輜重隊に場所を譲り、再び前進を続ける。

出発地の五里後から神代村までは約四^キ、頂上はもうすぐだ。その付近から道路沿いの電柱——といっても飯の細い丸太が倒れ、通信線が切断されているのを発見した。（敵は付近にいるらしいぞ）と緊張する。また、その付近の道路に青、桃、白色の紙を使った投降勧告ビラが石で押さえて並べてある。いよいよ敵の潜伏が確実となった。幹部の制止にかまわず拾い上げてみると、漢字、カナまじり文の謄写版刷り。

「親愛なる日本兵に告ぐ。君らは、何のために異国にて僕らと戦うのか、帰郷して各々生業にこころじやないか。君らは金鵄をもらうために働いて、白骨となる。故郷の妻子は涙を流すであろう。速やかに兵器を捨てて投降せよ。投降者には相当の優遇をする」と書いてある。

「こんなビラに日本兵士がまどわされるか」兵士たちは引ききいて空に投げた。この時だった。不意に左方の山からチェコ機銃の掃射を浴びせられたのは——。

弾丸の中を金器運ぶ

——敵は事前に襲撃を準備——

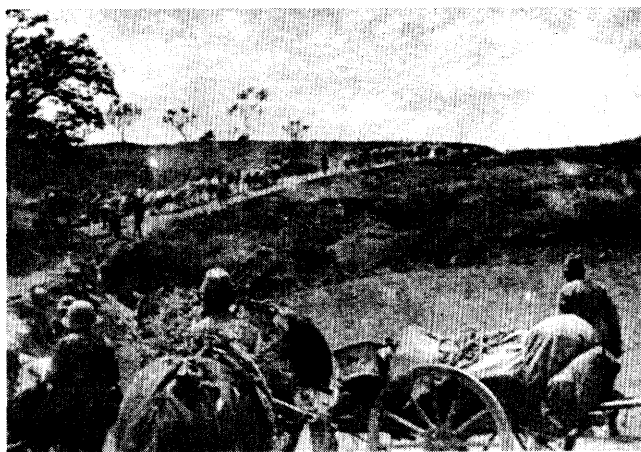
神代村付近の戦闘

すぐ頂上だ。この付近から地形は左側が断崖、右手は三十数^メのガケとなる。左の断崖の底には残雪が見えた。敵はこの谷を距てた約千五百^メ向こうの山からチェコで掃射をかけてきたのだ。思わず「敵襲ッ」と叫んだ駒田秀男特務兵、山の上は真っ黒、おびただしい敵兵だ。総立ちとなって機銃弾を降り注いでく

る。文字通り弾雨、しかも夕立ちの雨足のような激しさだ。不意打ちで部隊は混乱、二十分もたたぬうちに浅山上等兵は眉間を射ぬかれ、「うーん」とうめき声を残して戦死した。彼は会いたい、会いたいくぐり

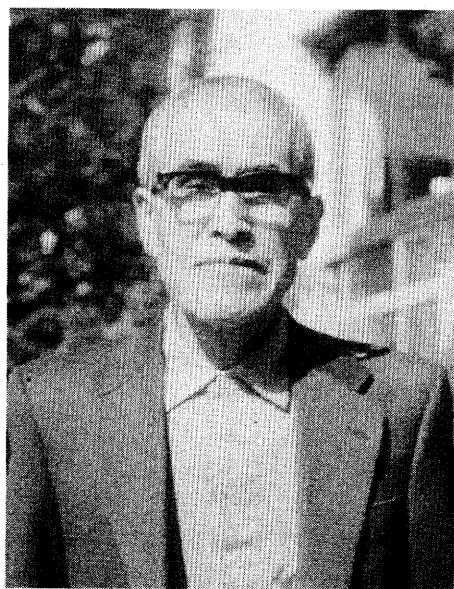
返していた妻子の顔を再び見ることも出来ずに死んで行ったのだ。タマの音と味方将校の絶叫、馬の悲鳴、それこそ筆舌に尽くせない戦闘が続く。ふと、右手のガケを見上げた駒田特務兵は「——ッ」息をのんだ。

歩兵の護衛を受けて急坂路を行く



って第一小隊の間を割って走る。このとき、ふと振りかえると足をやられた兵が車にしがみついている。

三十余名のガケの上から、敵兵が身を乗りだし、いまにも手投げ弾の雨を降らせようとしているのだ。これにあつたら一瞬間の間に全滅だ。「栗本班長、あぶない！」と絶叫して、馬のクツワをひつつかむと一目散にかけ出した。何しろ荷物を積んだ車を引いて逃げるのだから動きが鈍い。たちまち迫撃砲弾が追つかぶさり、弾幕の中に包まれた。戦友たちは駒田に直撃とみたが、黒煙が消えると走り続ける彼の姿が映った。幸い車のえん木をさかれただけですんだ。かえって突破をためらった戦友の方がガケからばらまかれた手投げ弾で大きな損害を出し、栗本班長も破片で顔をやられた。車をつけた馬のたづなを引っ張



今の浦尾玉男さん

「こらッ、降りろ、降りないと突き殺すぞッ」とどなったが、「助けてくれえ」と哀願する兵を捨てて行くわけにはいかない。走ること四、五百呎、やっと林隊長の所へたどり着くことが出来た。

「隊長殿、金器を持ってきました」

「そうか、山の向こうの安全地帯に上野主計がいるから、そこへ行け」

双眼鏡から目をはなした林隊長も安心した表情。道は山の向こう側へ曲がっており、そこは敵弾もほとんど来なかった。上野主計少尉は「兵隊、よくきた」と肩をたたき、涙を落として喜ぶ。手帳をだし、「名前をいえ、金鶏（キンシ）をもらってやる」と時刻などをメモした。駒田二等兵は、金器といっしょに自

隊用の弾薬箱も馬に積んだまま持ってきたことに気づいた。上野主計が「だれかこの弾薬を第一線へ届けてこい」と付近に固まっている十数人の兵に命じたがだれも名乗り出ない。

「自分が行ってきます」駒田二等兵が進み出ると松島一郎二等兵（一志郡美杉村八知出身）ともう一人が「自分も行きます」と出た。三人は弾薬箱のカギをねじ切り、八つの袋に包まれた計四百四十発を分配、背にかついでほふく前進、山科副官のもとに補給。帰りは馬を引っ張って安全地帯に引き返した。

戦友にいわれてからだを見回すと右手の甲から鮮血が流れている。破片でやられたものらしかった。黎城へ入ったのは夜の十時ごろ、生き残った者で飯ごう炊きさんした。

翌十七日は戦場掃除、十八日城内でタビ、十九日午前五時起床、潞安に引き揚げた。「あとで敵のざん壕を調べ、盛り土を掘りかえすとムギが黄色に変わっていた。一週間ほど前から襲撃準備をしていたものだろう」と回想している。

本部付（経理室助手）一等兵だった久居市牧、浦尾玉男さん（七）―清泉保育園事務局長―は「突然、左の山から射撃された。武器はゴボウ剣一本だ。思わず道路右側のみぞへとび込んだ。すると右側からも撃たれ、やむなく道路上を進行方向めざして夢中で走った。左の遠望りよう線を移動する敵軍を見たときは、いよいよだめだと戦死を覚悟したものでした。ともかく夕方友軍が救援に到着するまではやられほうだいでした」と語っている。

日本刀で立ち向かう

―カブラヤリの敵兵が迫る―

神代村付近の戦闘

車を伴う輜重隊の隊列は何しろ長い。先頭から最後尾までは二キロにわたっている。従って戦闘の状況も違ってくる。津市近辺の在住者が語っていたそれぞれの体験談。

○

○

○

渡辺甚太郎さん（五十年没）―津市乙部海岸通り出身―は本部付の特務一等兵だった。神代村の手前で小憩した部隊は前進を再開、約十五分山を登ったとき、突然手投げ弾を浴びせられた。銃は持っていない。馬からころげ落ちるようになって石だたみを下ると、小泉少尉がピストルで奮戦中だ。

「渡辺来たかッ」と声をかけたとき右手をやられ、ピストルを落とした。

「渡辺、お前が撃てッ！」

「はッ」

渡辺一等兵がピストルを拾い、構えた瞬間、小泉少尉は腹をまともに抜かれて倒れた。

「小隊長ッ」

抱き起こしたが息はなかった。背負って下がろうと立ち上がったが、自分の右足が前に出ない。調べると二発命中している。（ちきしょう、やりやがったなッ）と力を振りしぼったとき、こんどは迫撃砲弾が近くにサク裂、破片が右足首にかみつぎ、完全に自由を失った。

すでにこと切れている小泉少尉の手から軍刀を引ったくると三本足で前方高地を目標にはい出す。ナツ



急坂路を下り、目的地に向うわが隊、山西省大行山脈で

メのイバラが手に突き刺さる。だが夢中なので痛みは感じない。ふと後ろを見てぎょつとした。フサのついた朱ザヤのヤリ(カブラヤリ)を持った三人の敵兵が追ってくるのだ。(もうダメだ。クシ刺しにされる)観念した。

するとクソ度胸が湧いた。「こいつウジ虫、たたき切ってやる」わめいて日本刀を振り回す。若い敵兵は一瞬ひるんだが、すぐ追っかけてくる。のどは焼けつくようにかわき、あぶら汗が全身に吹き出す。出血とはこりて全身、文字通りの血だるまだ。やがて、断ガイに追いつめられてしまった。十数層の崖だ。だがとびおる以外に逃げる道はない。まず軍刀を落とし、すべるようにころげ落ちた。三回宙返りをしたのを覚えている。

どれほど氣を失っていたろうか。氣がついてあたりを見回したが人影がない。からだを引きずって残雪をほおぼり、のどをいやす。何気なく目をやると市川分隊長の戦死体が転がっていた。ともかく身をかくそうと、ススキの山腹をはい上がる。中腹にホラ穴があった。(しめたぞ)ともぐり込み、そのまま眠ってしまった。氣がつくと、すでに戦闘は終わったのかあたりはほとんど静まり返り、燃えているような真つ赤な大きな月が中天にあった。そのとき、土手の下から黒い影が二つ登ってくる。小泉少尉の遺品の軍刀を握りしめ、身構える。何やら話している。耳をすますと日本語だ。思わず「おーい」と叫ぶ。二つの影は「おれたちもかくまってくれ」と大声をあげながらかけ上がった。

時計は八時を指していた、やがて友軍の銃声を聞き、救援を求めロープで引き揚げてもらった。死体を積んだトラックに同乗させてもらい、潞安へ収容された。どんぶり一ぱいミルクを飲ませてもらい、はじ

めてわれにかえった。そして自分のすぐそばに、これも負傷した中川宗一一等兵（津市南浜町在住、後述）がいるのに気づいたのだった。「無煙炭を割る音にも、びくっと飛び上がるほどのショックを受けてしまった。紅ガラのような真っ赤な尿が出ましたよ」と死闘を回想している。



大行山脈の急坂を降りる、先頭辻田分隊長

津市西新町、杉山治さん（五十七年没）は第十四班の特務二等兵だった。十四、十五班付近は隊列の真ん中だ。いっせい射撃を浴びせられた。津市出身の八人の戦友のうち七人までやられ、杉山二等兵も左腕関節に盲貫銃創を受けた。馬がやられ、一步退いたところをチェコ機銃弾にやられたのだ。ガケにへばりついていたが、やがてチェコがやみ、敵兵が殺到してきた。あらかじめ見定めであつた地点からガケをころげ落ち、敵中をさまよいつながら二日後に弘前の野砲兵に救出されたのだった。

補充で出征した倉田一良さん（津市旭町出身）は獣医少尉だった。当番兵だった津市神納出身、佐野庄太郎一等兵のエピソードを語っている。神代村で佐野一等兵は胸に敵弾が当たったが負傷しなかった。徴

発した中国の銅貨を二、三枚財布に入れてもっていたが、タマは財布を通し、銅貨を曲げて止まっていたのだ。この報告の手紙を受けとった父親は、その手紙を仏壇に供えて何度も読んで手を合わせ、よろこんでいたそうだ。

一斉射撃浴び敗走

——地獄を見た県内出身兵——

神代村付近の戦闘

津市一身田出身、青木平男さんは輜重上等兵だった。戦闘開始ごろ、前田少尉のそばにいた。少尉は抜刀し、「青木、ここにとどまっておれ」と叫び、付近でしり込みする部下に「貴様ら、それでも日本人か」とどなっている。まもなく戦死。青木上等兵は「なむあみだぶつ……」と唱えながら、みぞをほふく、林隊長のいる所までたどり着いた。軍服の両ひじは破れていた。黄ジンで戦友の顔が見分けられぬほどだった。馬上で指揮中の仲森徳蔵班長も戦死した。負傷者を銃と巻きぎゃはんで急造のタンカに乗せて収容、車に乗せ川を渡って藜城にはいった。そこでも夜襲された。戦場掃除のとき「君が代」を歌ったら、付近にひそんでいた兵がそろそろ現れた。みんなこわくて、それまで身動きができなかったのだ。

伊勢市河崎町出身、田ヶ原直蔵さん（四十四年没）も一等兵で第十五班に属していた。左右から一斉に撃たれ、右手の谷へ退いた。敵情を見ようと土手にかけて上がった市川分隊長は、たちまち手投げ弾にやられころげ落ちてきた。とにかく無我夢中でどう戦ったものか覚えていません、と生前語っていた。

戦争ほど悲惨なものはない。戦死、負傷した人々はもちろんだが、北牟婁郡長島町出身の西山善四郎さんも犠牲者のひとり、特務一等兵で第二十六班だった。この戦闘で頭に三カ所、顔に一カ所、敵兵に青竜刀でメッタ打ちにされたが、奇跡的に生命だけはとりとめた。歩けるようになり退院、帰宅した。仕事にも従事できるようになったが、十九年六月戦傷が原因で死んだ。

津市出身、製菓業、清水裙雄さんも特務一等兵で第二十五班だった。天気もよいし鼻歌まじりの行軍だった。だから、はじめ後方に銃声を聞いたときは、小泉小隊長がまたカラスを撃ったなと思ったほどだった。一斉射撃を浴び、山の裏手へ逃げた。逃げる先々で敵兵と出くわし、うろろした。戦友に出会ってもお互いに口もきけないほど混乱していた。とある山腹のほら穴に五、六人の兵が退避していた。敵はガケの上から手投げ弾を投げ降ろしてくる。穴の入り口にいた津市中町出身の今井小六一等兵は、敵の投げつけてきた手投げ弾をすばやく拾っては、ガケの上へ投げ返す。二回くり返したとき、避ける間もなく敵の一弾が近くにサク裂、朱に染まって倒れた。そして「班員によろしく。天皇陛下バンザイ」と叫んで絶命した。彼は日蓮宗の信者で、ナムミョウホウレンゲキョウと大書した陣羽織を着ていた。妻の身寄りの娘さんを育てており「あれをヨメにやるまでは死ねない」と口ぐせのようにいつていたのに。清水一等兵は粕谷部隊にたどり着き、同班の小辻宇平一等兵の戦死を確認、救援にかけつけた野砲の弾薬運びをした。

元鳥羽水族館長中村楠雄氏（鳥羽市河内）は行李班の車両監視兵で隊の先頭を進んでいた。班長は山岡一男上等兵、隊員は三十人。神代村から約一^キ進んだとき、左側高地から猛射された。死角にかけ込み、軽機二丁と少数の小銃で応戦した。森泰助一等兵が戦死、近藤勤、山本正三、坂谷敏郎各一等兵らも重軽

傷を負って倒れる。戦利品のチェコはわが軍のタマが合わないのか故障、敵は肉薄してくる。勇敢な四、五人の敵は車両班に突入、軍用行李を青竜刀でたたき切ろうとした。大石大次郎一等兵が銃剣で応戦し敵の一人を倒したが、彼も頭や背を切りつけられ倒れた。「弾雨の中、われながらよく戦ったものだ。夢のようないない」と回想していた。

銃弾のあとは青竜刀

——気味悪いラッパ鳴らし——

神代村付近の戦闘

津市出身、中川宗一さんは、第十五班の特務一等兵だった。不意を突かれて隊は混乱、五、六人の兵と右手の土手にへばりついた。長谷川枡次郎一等兵（津市栗真町屋町出身）が「もう、あかんのう」と絶望したようにいったので「最後の五分間までがんばろう」と励ます。このとき、付近にいた兵が「きた、きたぞ」と叫んで、ばらばらガケを降りて行く。ふと左に目をやると、着剣した銃を構えた中国兵が突っ込んでくる。（わあッ）あわてて背を向けると、ガケの下へまくれ込んだ。このとき敵の一発が左腕をかすった。谷底にいた兵三人と前方の山めがけてかけあがろうとすると、山の上から吉田一雄一等兵（津市出身）が「上にも敵がいる」と叫んでころげ降りてきた。

しばらく待機して山に登り、見通しのきく場所から敵情を見る。右手の下に見える部落から敵兵が二、三人ずつ谷へやってくる。このとき右から五人の敵兵が銃を構えながらかけあがってきた。彼らはひざ撃

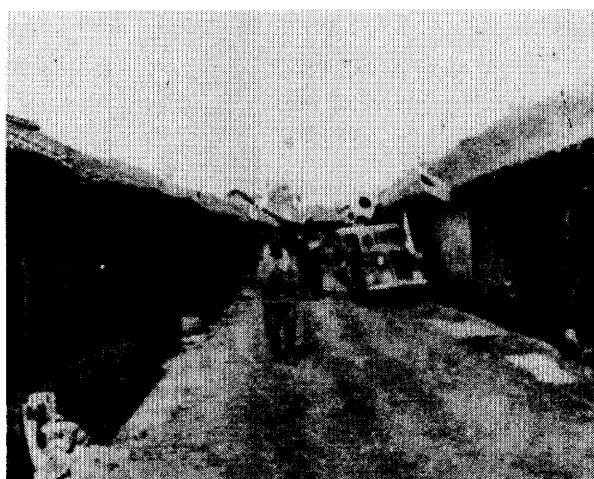
ちができないのか、立ち姿勢で射撃してきた。耳もとにうなる敵弾、夢中で逃げたが、たちまち千ジンの谷に出食わしてしまった。(こりゃいかん)と向きを変え前方へかける。土手の切れ目をころげ落ち、木の切り株で右わき腹をしたたか打った。さいわい二十数人の友軍に会い、やがて危地を脱した。

津市出身、加藤宗一さんも特務二等兵で第三十七班にいた。

乗馬で指揮中の第十八班長、中村嘉吉上等兵は腹を射抜かれ「うーん」とうめいて即死、加藤一等兵の目の前だった。白兵戦となり、加藤惣吉一等兵(桑名郡長島町出身)が敵兵に銃で左足首を払われ、谷底へころげ落ちて行った。同時に加藤一等兵も後頭部はじめ足など六発を浴び、気を失ってしまった。雨に打たれて気づくと友軍の死体の山の中に倒れていた。そろっと身を動かすと手投げ弾で顔をやられた伊藤芳郎一等兵

(松阪市愛宕町出身)も気がついたところだった。伊藤一等兵が付近を調べてくれたが敵の姿がそこそこにある、やむなく二人は死んだふりで友軍を待った。しばらくのあと工兵隊が到着、黎城へ収容された。

津市万町、朝井憲一さんは歩兵二等兵で第二十四班の軽機射手だった。その日は好天だったと記憶する。金器護衛が任務で、軽機をかついで前進していた。戦闘はまず前方で一発、後方で一発、これが敵の合図



北支の邯鄲・夢の邯鄲といわれたところ

だった。あつと思う間もなく迫撃砲、チェコ、小銃弾の雨がなぐりつけてきた。軽機——実はぶんどり品のチェコを乱射して応戦したが、まもなく薬きょうがしまったかタマが出なくなってしまうた。これを見た敵は五、六人が一組となり青竜刀、朱ザヤのヤリ、小銃を振りかざし、気味悪いチャルメララッパを鳴らして突っ込んできた。

このとき朝井一等兵は二十三歳、向こうみずの元気な時代だった。故障したチェコをたたきつけると、青竜刀を打ち降ろしてきた敵兵の胸元にとび込み、がっぷり組みついた。もみ合ううち約十秒のガケ下へころげ落ちてしまった。右手を負傷した程度なのですぐとび起き、林隊長のもとへかけつけ、以後隊長の指揮下で最後まで戦った。「わたしは初め第三十三連隊へとられたが、そのころ運悪く目を痛めたので帰され、輜重隊にはいった。万年一等兵で内地に残されたため沖縄で玉碎せずすみました」と回想している。津市一身田大古曾、伊藤計太郎さんは本部付き特務一等兵だった。潞安到着と同時に発熱し入院していた。もう一日はいつておれ、という軍医の命に従ったため神代村の奇襲には参加していなかった。そして野戦病院に運び込まれてくる戦友の戦死体の首実験をつとめた。そのころ、兵たちは認識票を捨ててつけない者が多く、衛生兵を困らせていた。津市白塚出身の内田巳之吉一等兵の死体も伊藤一等兵が確認した。

邯鄲に駐屯しているころ南牟婁郡紀宝町鮎田出身の逢野喜三郎一等兵が、しきりに首をかしげながら「伊藤、われわれの部隊の三分の二に死相が出ている。こんなことは初めてだ、どうしたことだろう」といったことがあった。伊藤一等兵は「なにを寝ぼけているかへボ占者」と一笑したものが、あとで思い

起こすと、その予言はまったく的中していたのだった。

戦友の涙を誘ったのは安芸郡河芸町南黒田出身、行方治三郎一等兵の最期。彼はガケ下で、胸に十二、三発浴び、背中に手投げ弾の爆創を負い戦死していた。その手に妻の写真をしっかりと握ったまま――。

上等兵、壮絶な最期

――最後の一発まで奮闘――

神代村付近の戦闘

伊勢市出身の騎兵上等兵（石山小隊第十八班長）中村嘉吉さんも神代村付近の戦闘で奮闘、戦死している。

“輜重隊（しちようたい）が敵の奇襲を受け、全滅にひんしている”との報により、潞安城内から急派された衛生隊五十人が、神代村の戦場に到着したのは十六日午後十一時ごろだった。青白い月光が累々と折り重なる人馬の死体を照らし出していた。自動車を下りた衛生隊はすぐに包帯所を開設し、戦死傷者の搜索收容にとりかかる。翌十七日午前二時までに戦死傷者を收容した。衛生隊は部落南地区の搜索をひとまず終え、北方搜索を始める。午前三時ごろ、道路右側山地方面の凹地に出て耳を澄ます。負傷者の声を聞き取り、所在をつかむためだ。と、斜め左の高地でかすかにうめき声がする。捜して見ると二人の兵がともに腹を貫通され虫の息だ。応急手当てをすると一人は安心したか人事不省となり、もう一人は割り合い元気だが口はまったくきけない。ただ右の方を指さし、何かを教えようとする。

衛生兵がその指先をたどると、二十疋ほど離れた所に三人の戦死体があった。その中の一人は左手に愛馬のタヅナをしつかりと握り、右手には銃を持ったまま絶命していた。彼のまわりには藁きょうが山を築き、最後の一発まで奮闘したことを物語っている。衛生兵は思わず黙とうした。その戦死者が中村上等兵だったのだ。右頭部を貫通されていた。遺品を探ると、上衣の右ポケットから手帳が見つかった。その手帳も迫撃砲弾の破片に食いちぎられている。表紙の裏には「六十四ページに妻子にあてたことが書いてある」と示されている。衛生兵がページをくると長男、忠さんへの遺書が書いてあった。「(前略) 忠はどんなことがあっても軍人としてのおれの心を継いでくれ。忠よ、父なきあとは母の教えをよく守り、早く大きくなって父の志を継ぎ、りっぱな軍人になってくれ。これが、日ごろよりおれの望んだことなるぞ。おれはいつ死んでも思い残すことなし」(原文のまま。十二年十一月二十一日於石家荘野戦病院) 衛生兵は手帳を閉じると涙をポロポロ落とし、冥福を祈って立ち上がった。

中村上等兵が妻、ともゑさんに出した最後の手



北支の邯鄲にて出陣以来初めて正月

紙には次のように書かれている。十三年三月五日潞安城内で書いたもので戦死の十日前である。

二月十三日に邯鄲を出発、七日間の強行軍の末潞安にはいり、しばらくはここで待機することになった。その間ある日は急な山道、または山にはさまれた河原、石だたみの山道、長い長い坂道、わたしら馬に乗っている者でも降りたり乗ったり骨の折れる道。特務兵の苦労はなみたいていでなかった。それに敵の襲撃にもたびたび会う。敵襲に備えて進む輸送隊の苦労はまったく涙ぐましいものだった。今わたしたちのいる所はとても不便な所で、手紙を出すことも受け取ることもできません。中隊長殿が何とか都合をつけてくれたので、やっとこの手紙一本だけが書けることになりました。あなたからの二月七日付けの手紙はやっと受け取りました。送ってくれた品物はまだ受け取ってませんが、いずれ邯鄲に帰って受け取れることもできると楽しみにしている。わたしのことは心配なく。国防婦人会でじゅうぶん働いてください。寒い時だからおかあさんのからだにはとくに気をつけてやってください。忠は幼稚園にやってください。お願いいたします。敬具。

中村上等兵は、妻とも多さんから送られた慰問品さえ受け取る機会もなく散華したのであった。

周囲の山から敵襲う

——背筋寒くなり観念する——

神代村付近の戦闘

同隊に所属していた人たちは、神代村付近の戦闘で戦死した戦友たちの冥福を祈り、生きのこった者の

親睦を深めようと、敵襲を受けた三月十六日を命日と定めて三・一六会を結成、年一回集まって供養している。

久居市野村、森川義一さん（七）同元町、後藤良一さん（七）も同会のメンバー。二人とも補充兵で戦闘経験はもとより軍事訓練を受けないまま派兵されたいわばズブの素人の兵隊さん。同隊には、現役組もあったが森川さんらのように未教育兵も多く、輜重（しちょう）輸卒が兵隊ならば、トンボチョウチョも鳥のうちというザレ歌があったほどで、「私らは戦闘兵ではなく、武器、弾薬、食糧等を運搬する役目で、いわば馬の運転手ですが、それが馬に触ったこともない。しかも馬も現地調達で、調教もしてない、兵隊も素人なら馬も素人だった」

と述懐する森川さん、後藤さんの体験談。

馬は天津から少し下がった豊台で与えられた。

何千頭と放し飼いされた馬の中から「好きな馬を一頭摺まえてこい」という命令。しかしそれまで馬の傍へ寄ったこともない。

「こわくて生きた心地がしなかった」というが、ともかく、自分の馬をしょっぴいてきて、石家荘めざし、一路京漢線を南下した。

列車が通るたび、馬がおどろいて走ったり、暴れたりする。馬に乗っている班長や分隊長はふり落とされてケガはする、車のえん木は折れる、ケガの手当や車両の修理をしながらの行軍、まだ見ぬ敵よりも、馬がこわかった。

森川さんらが初めて銃声を聞いたのは良郷、行軍二日目だった。パーンパーンと二、三発、敵は宋徳元部隊である。「いよいよ戦争だ。そう思ったらブルブルッときた、あれを武者震いというのでしょうか」

しかし石家荘までは第三十三連隊等戦闘部隊のあとをついて行ったのでほとんど危険はなかった。

一日に二十ギロ二十五ギの行軍だが途中クリークはある、湿地帯はある、底なし沼みたいな所があって、そこへ馬がはまり込むと、もがけばもがくほど沈み込んでしまう。たくさん馬を犠牲にした。日暮れに到着して、夜中の三時頃出発する強行軍だったから、暗闇で馬の死体につまづいたことも何度かあった。

「われわれは自分が食べるより馬が先、だから宿営地に着いたらまず井戸探したが、井戸が少ない、井戸の奪い合いをしたものだった。」「死体の浮いた水で米を洗った」

森川さん、後藤さんの話は馬と水の苦労談が絶えない。

難行軍のあげくカンタンに到着、ここではモチをついて正月を祝ったりしたが、山西省臨汾占領の命が下った第百八師団（弘前・林部隊長）の指揮下に入ることに、二十一日出発した。森川さんはその中に加わっていた。（後藤さんは残留部隊）

潞安占領、一応作戦は大禍なく完了、カンタンへ引き上げることになって三月十四日、潞安を出発した。潞城で一泊、久々に故郷の便りや慰問袋を手に出ることが出来る、心を弾ませての行軍だった。

そして問題の十六日は、空が晴れあがったよい天気だった。みな鼻唄まじりで進み、神代村の中で小休止、いざ出発ということで部隊長以下の先頭部隊一個小隊百六十―七十人が村を出たとたん、周囲の山に潜んでいた敵が襲いかかった。

神代村はスリ鉢の底のような部落、左も右も稜線に軽機関銃や小銃の敵がうようよ、後を向くと、山から下りた敵が手りゅう弾で攻めてくる。先頭の森川さんらはころうじて助かったが、後続の第二、三小隊は包囲されてしまった。

森川さんらは、三、四人で伏せていたが、何とか脱出しなければならぬ。一緒に走るのは危険だから、追いつがる戦友をふりきってまず森川さんが走った。必死で、仲間の所へたどりついたとたん、毛布となけなしの米をたいて詰めた飯ごうを落としたことに気づいた。射たれるぞとみなに引きとめられたが、森川さんは道路下の斜面を這いながら探しに引きかえした。すると五、六十歩行った所に、落ちていたのではないか。「しめた、飯ごうには砂が混じっていたが、そんなことは言っちゃいけない。第二小隊長の石山中尉が「おれの当番はどこへ行ったか分からん、すまんがその飯を少しよんでくれ」といわれ、砂まじりの弁当を分けた——こんなことも忘れ



朝熊山金剛証寺に建てられた慰霊碑

られない思い出である。

低い石垣まがいのしゃへい物の陰から、左右、後に迫った敵を見たときはゾッと背筋が寒くなり、もう助からないと思った。

翌日は戦友の遺体百十九を一つずつ穴を掘って、ダビに付した。森川さんは遺骨還送員となつて多くの戦友の遺骨を抱いて一時帰国したが「私があそこで死ななかつたのは、幸運というほかない」と語る。

幸運といえば森川さんも後藤さんもその後の中支戦でコレラにかかつて死線をさまよつた。あと一、二時間、船がタークーに着くのがおそく、宮崎部隊の久能軍医に世話にならなければ、助かつていなかったという。

人馬の死体が散乱

——マキ集め穴を掘って火葬——

神代村付近の戦闘

林部隊といっしょに編成されたのが馬場部隊（馬場三次郎騎兵少佐、桑名出身）であり、これも隊員のほとんどが郷土出身者であつた。つまり林部隊が第三中隊、馬場部隊が第四中隊であり、両中隊は真銅中佐の指揮下にはいつていた。またクーリーで編成した小松部隊や瀬成田部隊が一時的に真銅本部に隷属したこともあつた。行動概要は林部隊とほとんど同じなので省略する。

編成当時の小隊長は竹内俊雄（上野市）伊藤茂夫（桑名市）田中多仲（多気郡）の各少尉であつた。現



馬場部隊向かう応山から廣水鎮

在消息のわかっている隊員は約百七十人で、元鈴鹿市長杉本竜造氏、元伊勢商工会議所専務坂本彦兵衛氏らも馬場隊の隊員であった。

○ ○

津市万町塔世橋詰出身、荒川利兵衛さん（五十三年没）は馬場隊本部付き上等兵。林部隊の神代村付近の戦闘前後のようについて「除隊後、神代村で戦死した知人宅をうかがったとき、遺骨はだれの骨だかわかるものですか、といわれたことがあるが、遺骨は全部間違はなく本人のものです」と次のように当時の日記をくっている。

3月15日（昭和13年）

潞安城内で第百八師団戦死者の慰霊祭。本隊からは代表二百二十三人が参列。敵情悪く、残留者は城外に転宿準備する。

同16日

午前七時廉家店を出発、潞安城外約一キロの捉馬林にはいる。廉家店を出るとき、それまで同地にあった林部隊も同時にここを引き払い潞安——黎城間の兵たん輸送に出発して行った。わ

が部隊は午前十時ごろ捉馬村で宿営準備中、林部隊全滅の悲報を聞く。城内から歩兵が自動車で救援に出て行った。林部隊と別れてまだ四時間足らず、一寸先はヤミというが、あまりのことに口もきけないほど。

同17日

突然の命令。朝食もあわただしく竹内少尉以下二十五人とともに林部隊及び第百八師団輜重隊がやられた神代村の戦場掃除のためトラックに分乗、潞城東方六キロの現場に行く。悲惨。人馬の死体、敵に奪われ、かきまわされた車両、まったく足の踏み場もなく、しばらくはぼう然と立ちすくむ。死体は衛生隊に収容、自分らは車両を整理し、負傷者は潞城城内野戦病院へ、林部隊の戦死者はわが部隊へ自動車で運ぶ。午後十時任務を終え、宿営地に帰る。林部隊の戦死者百二十八、負傷八十、行方不明八、また第百八師団輜重隊は死八十、傷三十、不明五。捉馬村に待機中の第四野戦病院の援助で死体を処置、中隊全員で遺骨、遺品を入れる袋をつくる。

同18日

朝から手分けして林部隊戦死者の火葬を準備。第一、第二小隊は付近の部落にてマキの徴発（伊藤少尉指揮）第三小隊は火葬場の設置（田中少尉指揮）死体搬出係各小隊使役（房登伊達上等兵指揮）死体と名簿引き合わせ確認係（荒川上等兵指揮）こうして夕方には準備も出来、まず六十七人を火葬にする。火葬は一つの穴に六―八人をマクラを並べて寝かせ、遺骨が間違わないようマクラ元に名前を書いた棒グイを立てた。

同19日

僧籍にある者数人の読経により三十七人を火葬。

同 20 日

残余の五人を火葬、三日間の計百九柱。

同 21 日

敵影、廉家店に出没、林部隊から駒田茂上等兵以下が遺骨を受け取りにくる。林隊長もようやくあいさつにくる。その後ろ姿はなんとなくさびしそうだった。

「京都で編成されたとき、入隊してくる兵隊は到着順に二列に並ばされ、前列は第三、後列は第四中隊といとも簡単に編入されたものだった。このときすでに兵隊の運命は決まったようなものだった。」と回想している。

馬場部隊として記録にとどめたい戦闘は十二年十二月九日華北の司凹の戦闘と十三年二月十三日山西省東南部、西部崇義（すうぎ）の戦闘であり、後者は戦死六人、傷一人の損害を出している。

【神代村の戦死者】

輜重少尉、第一小隊長、前田孝、志摩郡阿児町立神、腹部及び胸部、前後頭部貫通▽同、第三小隊長、小泉貞一、松阪市新町、心臓部貫通▽獣医少尉、高橋勝治、秋田県、同▽衛生部見習医官、木村進、大阪市▽輜重兵長、西本春一、度会郡南勢町迫間▽同、第六分隊長、御辺夫美生、度会郡南勢町斎田、右コメ

カミ貫通▽同、第五分隊長、須藤万夫、四日市市塩浜、胸部手投げ彈爆創▽同、第三分隊長、市川太郎、同市保々、左胸部貫通▽獸医伍長、八木豊、度会郡度会村小川、腹部貫通▽輜重上等兵、中森徳藏、多氣郡大台町神瀬、心臓部貫通▽同、浅山嘉公、愛知県▽騎兵上等兵、米田弥市郎、奈良県▽同、中村嘉吉、伊勢市二俣町、心臓部貫通▽同、梅田福松、奈良県▽同、杉浦庸雄、同▽輜重上等兵、小林藤吉、一志郡美杉村八知、心臓部貫通▽同一等兵、溝田茂、松阪市朝見、同▽（以下特務一等兵）内田巳之吉、市川英雄、溝口政吉、角屋徳松、今井幸次郎、柏谷弥七、村田作次郎、浅尾龜太郎、山本藤三、山岡正左衛門、山崎基、中西久七、中野莊八、河井義雄、行方治三良、大川弥太郎、大石孝治、北尾新助、山下清太郎、山本石松、北村四郎、西井要藏、苔原左右六、宮崎橋之助、助田楠実、清水保、嶋田義雄、田中庄次郎、鈴木信太郎、浦上博、竹内繁松、岩野孝太郎、落合英男、山本徳三郎、安藤米吉、立道乙松、後藤繁郎、奥野新五郎、橋爪春太郎、今井小六、山本克次郎、大西米吉、杉本直吉、嶋崎勇男、松本市太郎、里中才松、谷口定治郎、吉富俊一郎、東九十九、浜口三次郎、芝山伝藏、中場新作、白玉末吉、青木鉄治郎、駒口幸之丞、中山政之助、熊沢米治郎、大栢卯三郎、前納悦三、堀坂政之助、小辻卯平、服部一衛、松田米吉、大森弥三郎、森泰助、仲谷伝市、鈴木利一、名倉善信、中井健一、鈴木泰悟、柳原定三、小林修一、今井清明、西村得三、市川克己、井上和一、浜口次夫、吉仲義一、奥野武四郎、西田正二、清水四郎、大西啓三、治田正二、佐藤進、土田益雄、山川新吉、宮田正二、野崎一平、山中常雄、橋本光夫、谷口菊雄、笠井長三、落合貞男、別所三郎、内田修、市川正、岡林正太郎、奥田広、水本保義、小菅正男、鷺田俊夫（以上百十八人）

右目の負傷後も射撃

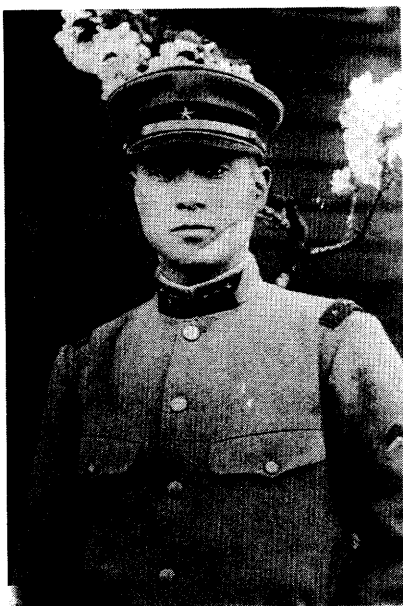
—— 輕機を手に23歳で戦死 ——

朝鮮の大邱歩兵第八十連隊に所屬して支那事變に参加、右目を敵弾に射抜かれながらも握った輕機を放さず奮戦、壮烈な戦死をとげた多氣郡宮川村上眞出身、中谷三武郎曹長の話である。

山西作戰も末期に近づいた昭和十二年十一月五日、流れる水も凍るほど冷たい朝だった。その朝早く、中谷曹長の屬する大隊（大隊名不詳）は新しい命令を受け、部隊主力に逆行して前進を開始した。目的は後方で苦戦中の友軍の救援、行く先はるか黄河上流に沿う大溪谷の北側高原地帯の広陽村である。歩兵となって前進を続ける片岡中隊は午後一時半ごろ狗兒煙（くじいん）と小部落の南方高地に達した。山西省の山奥、太原から約百二十キロの地点にあたる高原地帯で、黄河の支流はちょうど眼下に望めた。このときだ。

一列縦隊となつて続々南下中の敵約四百を発見した。おそらく前日、わが輜重隊などを襲った敵に違いない。（につつき敵、戦友のアダを討ってくれるぞ）将兵はピンと緊張、片岡中隊長はひそかに展開を命じた。

味方と敵の間にはひとつの地物もなく、くっきりとしたりよう線でその左にやや高いマンジュウ型の高地がある。敵の死命を制す要点である。片岡中隊長は直ちに第三小隊長代理の中谷曹長（小隊長は特別任



偉勲に輝く中谷曹長（上等兵当時）

してきた。敵との間は何の地物もなく、ただ敵の方に向かって下り斜面になっているだけだ。中谷曹長は伏せの姿勢で左右にはい回って勇敢に指揮、さらに前進を督励して敵前わずか六十メートルまで迫った。敵は巧みにガケを利用して正確にソ撃してくる。

中谷曹長のすぐ前で盛んに射撃していた軽機手家田上等兵が腰に、続く北岡上等兵も頭にいずれも貫通鋭創を受け、倒れた。愛する部下の戦死を見た中谷曹長は（くそッ）と叫んであつという間にはい出し、ぐいっと軽機を握るやパリパリッと撃ちはじめた。右後方にいた中隊長はハラハラ見守ったが兵たちは思わず痛快を叫んだものだ。

だが午後三時三十分だった。敵の一弾が曹長の右目から頭を貫いた、瞬間、連続していた爆音がはたと

務中で不在）を呼び寄せ「左前方高地を奪取し、敵の右翼を攻撃せよ」と命じた。中隊の後方を部下と冗談をいいながら前進していた中谷曹長は中隊長の命を受けると、流れる汗もぬぐわずニッコリ笑ってとびだして行った。中谷曹長を先頭に高地にかけあがった第三小隊は、軽機関銃の掃射を浴びせかける。不意をくらった敵は大混乱に陥った。だが四百という多数のうえ、精鋭共産軍（山西省）だ。すぐ付近のガケに散開して激しく応射

止まったが、すぐ調子のよい発射音が響いた。だれも気づかなかった。同じ姿勢を保っていたからだ。そのうち隣りにいた某一等兵がふと見ると、曹長の顔が血だらけ、引き金にかけた右手にまで鮮血がとび散っている。思わずかけ寄って「小隊長殿、下がって下さいッ」と叫んだが、「これぐらいで下されるかノ」と大カツ、握った軽機を放さない。衛生兵もかけつけたが、後退を聞き入れない。普通の者なら失神する重傷だ。だが意識はしっかりしており、右目をやられては照準出来ないはずなのに約半時間も射撃を続けた。ついに午後四時、がっくり倒れた。後方に下げたが急所をやられているだけに手の施しようがない。片桐中隊長が「いい残すことはないか」とたずねると静かに首を左右に振り、部下の名を呼んで息を引きとった。午後七時かきりだった。

敵はやがて退却、部隊はその夜再び前進に移った。曹長以下戦死者の遺体はタンカで運び、六日夜火葬、白木の箱におさめられた。

中谷曹長（長男）は七歳で母に死別、父と姉弟を助け尋常小学校を出ると津の商店でデッチ奉公していたが、軍人を志して十九歳のとき八十連隊に志願、一年後には中隊一番の成績で上等兵候補として陸軍教導学校（豊橋）に入った。「人間は意気と努力だ」という手紙を故郷に送り、張り切っていた矢先、七月末の最初の動員で事変に参加、二十二歳の若さで、苦勞ばかりの生涯を閉じた。

遺族は、父は昭和二十年十月、台風で切れた高圧線にふれ感電死、末妹のたいさんがあとを継いだ。

悲喜こもこも初年兵のころ

——山崎仁夫さん（上野市野間）が語る——

昭和十年十二月一日、私は、郷里に近い久居の歩兵第三十三連隊に初年兵として入隊した。これは、その年の初めに、郷里で行われた徴兵検査で、甲種合格となったがためである。当時、わが国の政治問題の中心地は、極東地域で、数年前に始まった満州事変も一応おさまり、満州国が新しく建国された直後であったが、その地方には未だ満州国の建国に抵抗する各種の勢力がはびこっていて、時々日本軍の勇ましい活躍が新聞紙上を賑わしていた。

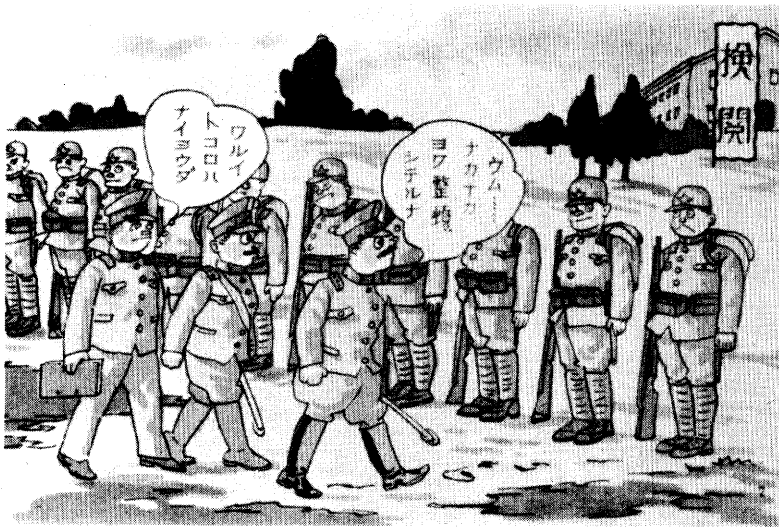
私の入隊した歩兵第三十三連隊は、ちょうど満州警備のため、北滿に駐屯していて、連隊本部はチチハルの東大營にあった。私達は新しい軍服や、名前も一度には覚えきれないような数々の装具を支給されて、並んで歩くことと敬礼の仕方だけを教えられた、はなはだ頼りない軍人のまま渡満することになった。この久居の連隊には、それから十年近くあとで、中隊長として勤務することになったが、徴兵による初年兵の当時としては全く想像もなかったことである。

伊勢神宮での出征報告のための部隊の参拝、阿漕駅における軍用列車乗り込み前の家族との面会、国防婦人会の湯茶の接待、郷里近くの拓植駅での親戚一同との最後の別れ、等々の劇的シーン。それから何回も出征した後から考えると大したこともなかったのだが、その時は銃後の国民に大きく期待されているという感激と、これが祖国の見納めかという悲壮な覚悟で胸が一杯であった。

神戸港から御用船で北鮮の雄基に上陸。零下三〇度前後の雪原だが、もうあきらめていて、どこへでも連れていけ、という感じ。しかも同じ境遇でありまた同じ気持の初年兵ばかりであるので、それほど深刻な思いもない。

どこをどんなふうに通ったのか、また何日かかったのか、今では全く記憶はないが、ようやく駐屯地のチチハルに到着した。練瓦建ての立派な二階建ての兵舎の前に全員が整列して、連隊長の訓示がある。十二月の末の北満であるので、内地では想像もつかない酷寒であったはずだが肩に食い込む背囊の重さだけが記憶に残っている。

軍隊生活の経験のある方はどなたでもご存知のことであるが、入営後の初年兵が一番鍛えられるのは、一期の検閲前の三カ月間である。この間に鍛えられるのは、野外で行われる戦争技術習得のための基礎訓練だけではない。内務実施といって、兵室の起居動作全体が訓練の対象であって、初年兵にとっては困ったことに、中隊の幹



厳しい教育訓練・銃口検査

部がおらなくなった朝晩と夜間に集中して行われる。

この時間は、伍長や新品の軍曹が中隊の殿様で、内務班の兵室は、二年兵のからの悪いのが牛耳っている。消燈ラッパが、

「兵隊さんは可哀相だなあー」

また寝て泣くのかよー」

と鳴って、班内が暗くなると、彼等殿様たちの天下である。

「第一内務班の初年兵起床」

初年兵は襦袢袴^{じゆばんこした}下のままの姿で、各自の寝台の前に整列して、不動の姿勢をとる。

「赤丸二等兵、貴様は銃の手入れを行ったか」

「やりました」

「ここへ出てこい。引鉄^{ようじんがね}の用心金の裏に、ほこりが残っている」

「手入れをしました」

「文句はいらん」

パン、パン。両頬のビンタが始まる。

「青山二等兵。お前の銃には安全装置がかかっているぞ」

「白川二等兵。お前の銃の床尾板^{しゅうびばん}に練兵場の赤土がついている」

「三人共廊下へ出て来い。銃を持って来て捧げ銃だ」

「俺のいうとおり、大きな声で三八式歩兵銃にあやまれ」

「三八式歩兵銃様」

「誠に申し訳ございません」

「今後は、このようなことにならないよう注意します」

「どうぞ、お許し下さい」

「全員二列に並べ。前列回れ右。対抗演習始め」

対抗演習とは、向かい合った者同士が相手の頬を交互になぐり合う自己懲罰の動作である。初年兵同士であるので、相手をなぐるのに、少しでも手心を加えて力を抜くと、

「黒崎二等兵、それが対抗演習か。俺が模範を示す。齒を食いしばれ、よいか」

眼の玉が飛び出す様な奴を二発も頂戴する。このようなことが毎晩だ。

「軍靴ぐんかの裏に土がついている」

「たんつぼの掃除が出来ていない」

「今日の演習で、落伍した奴がいる」

「班長どのの飯に、麦が多かった」

「靴下えりふが汚れている。襟布の手入れが不十分」

いくらでも、彼等の眼から見れば、初年兵をしぼる種はあるものだ。当時でも、私的制裁には若干の批判があったが、このようなことが何日も何日も繰り返されて、初年兵の動作が段々と機敏になり、面の皮

も厚くなつていく。

初年兵の教官は、日比野少尉といって、今年、陸軍士官学校を卒業したばかりの、紅顔可憐の美少年であつた。私達は内務班では、二年兵に氣をつかつてばかりいて、緊張の連続であつたが、この日比野少尉の実施する初年兵教育は、一番楽しい時間であつた。私達第一班の初年兵は学校出で、幹部候補生の受験資格のある者ばかりであるので、彼は、士官学校で自分が受けた教育と同じ要領で、我々の人格を尊重しながら将校教育、幹部養成教育を行っているというような、厳格ではあるが愛情のこもつた訓練であつた。それから数年して私が少尉に任官し、平壤の歩兵第七十七連隊で召集兵の実戦教育を行ったことがあつたが、いつもかつての日比野少尉の教育方法を思い出しながら、厳格にしかつ、温情のある教育を行ったつもりである。

初年兵教育には、戦闘のための基本動作である各個戦闘教練と基本射撃、銃剣術に大部分の時間がさかれるが、この中で初年兵が一番苦勞するのは銃剣術だ。この訓練は、正規の時間に基本動作は教えてくれるのだが、そのあとの練習は朝夕中隊前の広場で行われる。「間稽古^{まげいこ}」である。

「初年兵、銃剣術に集合」

の声がかかると、木銃と防具を持って舎前に急ぐ。腕に自慢の下士官や班の二年兵が相手だ。対等に仕合いが出来る筈がない。脚がもつれる。眼に汗が入る。

「しっかり掛けて来い」

力一杯突いて行くと、軽くはずされて、木銃で地面に押し倒される。立ち上つて、突いて行く。また、

倒される。大人と幼稚園の園児との相撲のようだ。私は、当時体重が五十キロあるかなしで、保護兵という名の弱兵の類に入っていた。腕も細くて、銃剣術の防具をつけると、肩当ての下からまるで細い骨が突き出ているような不様な姿であったので、相手から骨のような上膊部をさんさんに突き上げられて、あげくのはては左手が曲げられなくなってしまった。日比野教官のすすめもあって、病院で診断して貰うと、「化骨」しているという。骨と皮との間に僅かに存在していた筋肉が、骨のように硬くなったとのことである。軍医どのは、「なかなか直らないと思うが、湿布でもしておけ」という。中隊付きの衛生兵は、

「一生直らないぞ。兵役免除だなあ」

勇躍征途に上った訳であるのに、銃剣術で突かれて腕が曲って廃兵になったといつて、故郷に帰ることも出来ない。演習も一切休まず、腕を曲げたまままで頑張ることにした。

三カ月近く経つと、北満の風も何となく軟らかになって来た。未だ地下深くまで凍ってはいるが、あの膚を刺すような厳しさはない。討伐に出動していた二年兵も帰って来て、一期の検閲が始まった。そして、今日は最後の部隊戦闘教練で、三カ月間の訓練の総仕上げを連隊長どのに御見せするのである。

見渡す限りの平原に、薄雪が白く残っていて、地面は未だコチョコチの凍土である。遙か遠方に丘陵地が見えて、これが仮設の敵のトーチカ陣地であり、今日の我々の攻撃目標であるのだ。

日比野少尉の攻撃前進の号令が、透き通った声で曠野にこだまする。我々は立って走ることが許されない。全員はふく前進だ。地面に腹ばいになって銃を両手で身体の前に水平に支えたままにじり寄る、尺取虫式のはふく前進だ。一〇〇米、二〇〇米。銃を支えている両手がしびれてくる。腹の皮がいたくなってくる。

一休みすると、二年兵より遅れてくるので、ひと息つく訳にも行かない。五〇〇米、七〇〇米。凍土の上であるが、寒さなんかは一切感じない。汗が固まったのか顔がジャリジャリになる。

一〇〇〇米、一二〇〇米、もう自分の身体か、誰の身体か分からなくなって来た時、日比野少尉の突撃号令である。

「突撃に進め」

「突き込め」

我々は一勢に立ち上って、煙幕の中を敵のトーチカに突撃した。

「状況終わり」

トーチカ攻撃の演習はこれで終了して、トーチカ前に整列した一同に対して、連隊長殿の講評があった。「諸子の攻撃前進は立派であった。これで、ソ連陣地に対する攻略も大丈夫である」

日比野少尉以下、我々一同、連隊長殿の激賞にあずかったのであった。

しかし、私はそれ以上にうれしいことに気がついた。化骨していたはずの私の上膊部がほく前進の間にいつの間にか軟らかくなって、完全に治っている。

「教官殿、自分の手が治りました。見て下さい」

「山崎二等兵、よかったなあ」

日比野少尉は、私の両腕をカーキ色の将校用手套のままの両手でやさしくさすって、心から喜んでくれたのであった。

赤い夕日が雪の曠野の果てに沈みかけた頃、我々は元気に軍歌をうたいながらトーチカ陣地を後にして兵舎に向かった。

私は、決して戦争の愛好者でも軍隊の崇拜者でもない。しかしながら、青年時代の大部分を過ごした外地での軍隊生活は、いろいろ教えられることの多かった有意義な期間であつたと思っている。

第十二章 徐州会戦から武漢三鎮占領の概観

大本營の戦線不拡大の方針には変更はなかったが、とにかく敵に自由な兵力の転用を許し、その被害が大きくなるのは全局面に極めて不利益であることはいうまでもないことなので、徐州に集結しつつある敵集団に対し、できる限り小さな犠牲で大きな打撃を与えるよう処置しようとしたのであった。第二軍の作戦も敵の反攻撃破という限定作戦として認可されたものである。

大本營は徐州作戦において大きな戦果をおさめることはもちろんであるが、敵が最後の砦と企図する会戦後の態勢、即ち武漢を最後の決戦場とし、一挙に優位に立てる講和を考慮していたのである。

このための新設師団の編成が終わり、戦線に投入出来るとただちに武漢周辺と広東を占領しようと企図し、支那事変の終結を考えるようになった。

早期に会戦終局へ

——戦争不拡大方針を基に——

徐州作戦の経過は詳細な実戦の体験を掲載してきたので割愛するが、南京攻防の大会戦に日本軍は疲弊し、戦力の回復は困難なこの機を逃がさず「一挙に覆滅せん」と豪語する蒋介石の最後の奮闘だけに、防

備もそれにふさわしいものであった。こうした状況をかえりみ、わが軍の勇奮力闘、これを覆滅もつて勝利の和平に到達しようとした軌跡を概観して行くことも本項発起にふさわしいものであると考える。

台児莊において挾撃を受け、苦戦を味わった第五師団、第十師団も態勢を整え、面目は回復した。しかし目の前の敵が勝利に乗じて積極的な挑発をしてくるのをじっと我慢することは出来ないことで、これを追い払わしてくれというのが動因となって、この勢いがぐんぐんのびて行った。

折角の敵、しかも直系軍の精鋭をふくむ大兵力が集まっているのだから、この敵をたたくのは一つの戦機にもなるというのが徐州会戦の考えの発端であって、いよいよ現地からも人を呼び、本格的な大会戦となった。

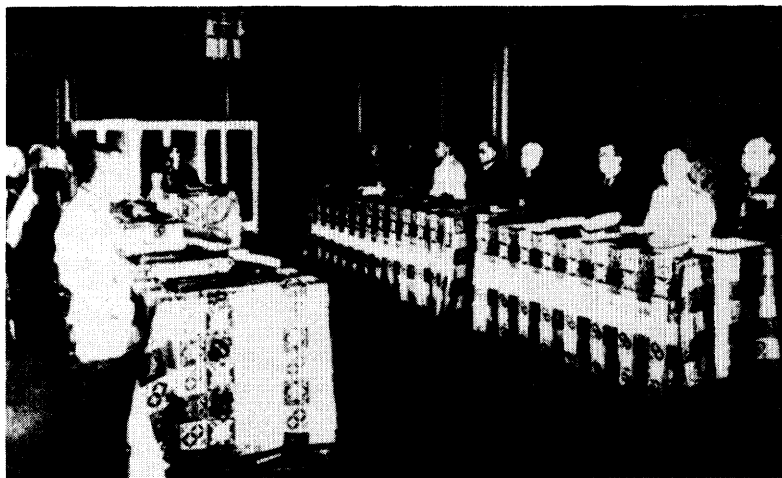
この会戦は敵に大打撃を与えて戦争を終局に導こうというもので、不拡大の戦争指導方針を逸脱した考えで行ったものではなかったと、当時橋本群少将大本営作戦部長は大本営参謀の竹田宮殿下のご下問に報告している。以下その要点を採録した。

殿下 戦争不拡大方針のもとでなぜ徐州会戦が漢口攻略戦に連なっていたのか。

橋本 形の上は別として徐州会戦は決して漢口攻略戦の準備のため実施した作戦ではなく、当初予定もせず、また実はやりたくもありませんでした。徐州会戦は現地の実情から生まれたもので、やる以上はいままでの方針に拘泥せず敵の本拠を有効にたたこうということになったのであります。

次に竹田宮は橋本参謀に痛烈な下問をしている。

殿下 徐州会戦は戦線不拡大方針から拡大への決心回転期であるのですか。



御前会議

橋本 戦線不拡大というのも絶対的なものではなく、兵力の關係上時期的なものです。この意味において決心の転回期と申しても差しつかえないのでしょう。そして、その変更は必ずしも中央の自発的方針の変換から来たものではなく、現実の状況がそういうふうになってきたのであります。

殿下 その決心のあとに御前会議が開かれたのですか。

橋本 いや、そうではありません。正式の記録はどうなっているか知りませんが、御前会議（昭和十三年二月十六日）のあとに決心が出来たように覚えております。

殿下 正式の記録を見ると、この時期に根本方針が変わったように思いますが。

橋本 根本方針を変えたということとは言えないのです。

殿下 しかしそれまでは戦局不拡大の方針でやろうという腹であったのではないのですか。

橋本 戦線不拡大の方針も時期的なものです。しかもこの一般方針を取るにしても状況によってはある程度のこととはやることもあるという御前会議の決定であったと思います。徐

州会戦なるものは予定していなかったもので、前にも述べましたように、現地の状況がこうなつて来た以上、やむを得ずやろうということになったもので、徐州会戦は御前會議で定まつたものではありません。ただ徐州会戦の計画が決まつたときに上奏は致しました。そのときの考えは前にも申しましたように、現地の状況が変わつたから一撃を加える必要があるというのに始まつて、徐州会戦というものの構想を定めるのに関連して漢口作戰のことを考慮したことは前にも述べた通りです。このときにはまだ漢口作戰に対する具体的な計画が出来ていたわけではありません。

池河付近の敵突破

—— 淮河南岸を占領へ ——

群衆心理というのか、時の勢いというものは破竹衝動を起こすものであることは各自も体験しているが、台児莊から徐州大会戦への道はまさにその好事例である。大本營並びに政府・内閣では早期終戦處理を目ざし、不拡大方針のもとに極力戦線の統一、縮小をはかつていたのである。

わが軍の各兵団は南京攻略後、各地域の警備治安維持に任じていたが、各地区の敵（支那軍）も陣地を構築、防衛態勢を強化、特に第十三師団の前面の中支蚌埠（ばんぶう）県淮関、定遠の前面の線は強固な陣地を増強、その兵力は十四個師に達し、わが軍に対してしばしば挑戦、逆襲してくるのであった。

やむを得ず第十三師団は上海派遣軍にこれが討伐撃滅を上申、許認されたので池河付近の敵陣を突破、二月二日までに県淮関、鳳陽、蚌埠など淮河南岸地区を占領し、懷遠、小蚌埠、十日には県淮関北岸の要

地を占領した。

中支方面軍は作戦後、速やかに現駐地に帰還を指示していたのであったが、勢いの赴くところ情勢の推移はそのまま徐州会戦に移行して行つたのである。

昭和十三年二月三日、参謀本部より膠済鉄道（済南より青島に至る線）の警備にあたつていた第五師団（一、二略）に、所要に応じ、迅速に海路他方面に転用し得るよう膠済沿線に位置すべしと下命されていたが、中支那方面軍第一課長下山大佐は参謀本部第二課長河辺虎四郎大佐あてに次の電報を發した。

「徐州東西の隴海線北方、山東省湖沼地帯の西側地域において、わが軍により大なる打撃を蒙らざる十数万の支那軍が集結し、これを根拠とする便衣隊等多数がわが第一線の後方に潜入し、随所に反撃をあえてし、最近はほとんど連夜襲撃を受けるので、第一線はようやく疲るるの徴を認む。これをもって軍自衛の見地より機を見て敵の根拠地に向かい、痛撃を加うるの必要



蒋介石直系の中央軍

あり。特に濟南南方の地域にありては現在の占拠地を越え、反撃的作戰を実施せざるを得ない時期がひつ迫せるものと判断せらるにはこの点に關し、行動の余地を存せしめらるることくご配慮わずらわしたし」と上申している。

以上その例を一、二示したが、各地とも大同小異の反撃を受け、防備に奔走していたのが事実であつた。しかし、これに対し、參謀本部第二課長河辺虎四郎大佐は攻撃作戰禁止の次のような電報を發している。

画然たる天然的地障の托すべきものなくして数の上で極めて優勢なる敗残の敵に対する方面においては貴電に見るがごとき情勢の現出は想像に難からず、然れども当方としては敵に誘發誘致せられ、思わざる戦線を拡大し、兵力を吸収せらることは国軍全般の整理整頓、ついで考うべき大転機に対応する施策に妨害を生ずるの点にして、貴電のごとく当面の敵に一大痛棒を食わさんとするも、地勢上より見ても要するに擊攘するといふのに過ぎず。この結果たとい省境を越えずといふも、ここに拠るべき地障としてなく、守るわけにも行かず、現在の態勢をやや南方に轉移せしむるというに過ぎざるべし。(中略)従つて現在の占拠地域以南には仮令自衛上の攻勢動作とはいへその結果、占拠地域を拡大し、もしくはさらに多くの兵力を吸収せらるるがごときは既に確立したる中央の大方針としては絶対にお許しなきものと承知せられたし。

この命令により北支方面軍は中央の意図に基き二月五日、第二軍に対し、「第二軍司令官(西尾寿造大将)は以後黄河以南にありてはおおむね現在の占領線以北(大運河)及び以東の山東省ならびに黄河以北にありては従来の作戰地域内において各要地を占拠し、該地域の安定確保に任じ、特にその治安を肅正すべし、

青島市及びその付近の要地占拠に関する任務故のごとし」と命令した。

ところが、第二軍がその命令を遵奉出来なかった。その理由も肯けるのである。

こうして第五師団（師団長板垣征四郎中将）第十師団（師団長磯谷廉介中将）が濟寧付近の敵を大運河以西に撃攘せざるを得ない情勢となり、濟寧方面の敵に反撃を開始、三月二十六日には大運河を越えて嘉章を占領し、同地一帯の掃討を実施した。このことが台児莊付近の大会戦へ発展し、退くに退かれず、徐州の大会戦へ進展して行ったのである。

そして徐州の大会戦後武漢攻略という大決戦にのぞむことになった。もちろん徐州戦発端の頃は、中央にも方面軍にも武漢戦等考えにもなかったのである。

漢口攻略の命下る

——京漢線遮断し敵を阻止——

隴海線（南方に進撃した兵团）

戦機が熟したという。戦争を行う以上は勝たなければならない。それには天の利、地の利、人の和が肝要であり、これに加えて「戦機」がものを言う。

わが国は昭和十三年以降、昭和十六年末をもって終結を図るといふ戦争指導計画の大綱が、御前会議でご親裁を得ていた。こうして確立された不拡大方針の大綱を覆し、破たんさせても行わざるを得なかったのが徐州会戦であった。これが戦機というものである。

この徐州会戦についてはすでに詳述してきたので重複を避け、徐州会戦から発展した同じ配下の第二軍西尾寿造中将の率いる漢口攻略戦の第五師団と第十師団、第三師団の概要をお知らせしたい。

くつわを並べて隴海線を挟み、先陣を争っていた北から酒井少将の率いる酒井支隊、第三師団、第十三師団、第十六師団、第十師団が鄭州の前面三劉砦の黄河決壊攻撃に転進を余儀なくされたことは既述の通りである。京漢線に進出、これを遮断しようとするわが軍の企図を察知した敵は通路という通路を徹底的に破壊したので、雨季とも重なり前進は難渋を極めた。

六安、霍山以西の道路破壊の余裕を与えないため速やかな行動を開始し、一挙光州―商城の線に進出し、以後信陽を占領し、同方面および京漢線を遮断して敵の南下を阻止、漢口北方地区に向かう作戦を準備することに計画を変更し、八月二十日、次の命令が下達された。このときすでに大本営においても漢口攻略に関する大陸命は発しられていたのである。

大陸命第百八十八号（八月二十二日）

(一) 中支那派遣軍は海軍と協同して漢口付近の要地を攻略占拠すべし。この間なるべく多くの敵を撃破するに努むべし。漢口付近攻略後の占拠地はつとめて緊縮すべし。

(二) 北支那方面軍は中支那派遣軍の作戦に策応して敵を牽制するに努むべし。

同日、大海令により「支那方面艦隊司令長官は陸軍と協同して漢口を攻略すべし」と下令された。

また同日次の大陸示が出された。

大陸命第百八十八号に基づき次のごとく指示す。

(一)陸海軍協定は直接関係部隊間において実施すべし

(二)漢口に向かう中支那派遣軍の作戦は信陽、岳州、南昌付近を越えて行わず。また北支那方面軍の黄河沢水地域を越えて行う作戦は行わざるものとす。

(三)漢口付近攻略後の占拠地域に関しては別に指示す。

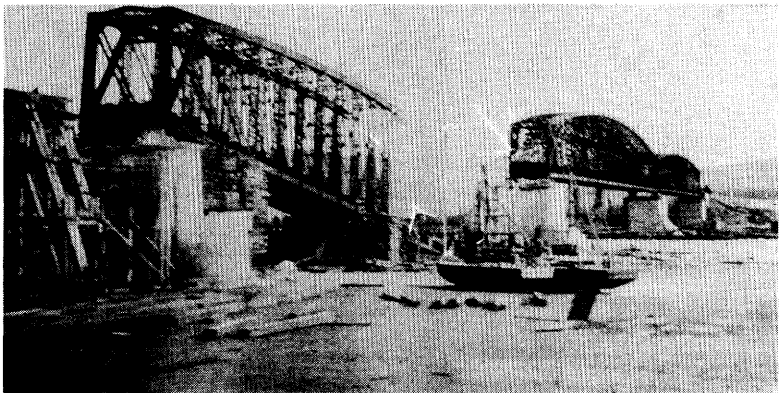
この大陸命により漢口作戦の目的を明示するほか大陸示により、作戦の限界と北支那方面軍の敵を牽制する範囲が明示されたのである。

中支那派遣軍命令

中支那派遣軍は既述の通り漢口作戦の準備を進めており、漢口攻略に関する現地軍の陸海軍協定も七月三十一日に終了していた。

派遣軍の兵力集中は、第二軍において黄河決壊による多くの困難があり、第十一軍においては第二十七師団の輸送が停滞し、揚子江北岸の第六師団の補給に困難な状況を呈していた。

中支派遣軍は八月二十二日、次の軍命令によって第二軍に光州、商城の線への進出を、第十一軍に瑞昌、德安付近の集中と永修付近の占領をそれぞれ命じた。



我騎兵隊が爆破した京漢線の鉄橋を修理する敵軍

中支那派遣軍命令（於南京）本文略す。中支那派遣軍司令官畑俊六

第二軍命令は、前述の大本營の漢口攻略命令及び派遣軍命令より二日前の発表であるが、派遣軍の了解のもとに作戰部隊の發進準備を進めるため、早く發令したものであった。

(一)第十師団は六安付近の敵を擊破し、速やかに光州付近に進出し、おおむね信陽方面に向かう作戰を準備する。

(二)第十三師団は当面、特に霍山付近の敵を擊破し、速やかに商城付近に進出しておおむね漢口北方地区に向かう作戰を準備する。

(三)第十六師団は作戰の進捗に伴い、一部をもって固始（六安北西百^キロ）葉家集（六安西方五十^キロ）以東廬州間の主要交通路上及び付近要地の警備に任ずるとともに逐次固始付近に推進する。特に歩兵約二大隊を基幹とする部隊を先遣して舒城、桐城（含む）間の交通路線を確保させるとともに第十二師団に追尾して霍山付近の警備を継承し、英山方面に対して警戒させる。

(四)第三師団は八月二十三日以後江北に移り、廬州、桃鎮（廬州南西四十^キロ）付近に兵力を集結する。江北津浦沿線地区の警備（歩兵第六連隊主力担任）は依然続行する。

第三師団は八月二十二日、大陸命によって中支那派遣軍から第二軍戰闘序列に編入された。

漢口放棄、抗戦の構え

—— 国民政府、勝利の和平図る ——

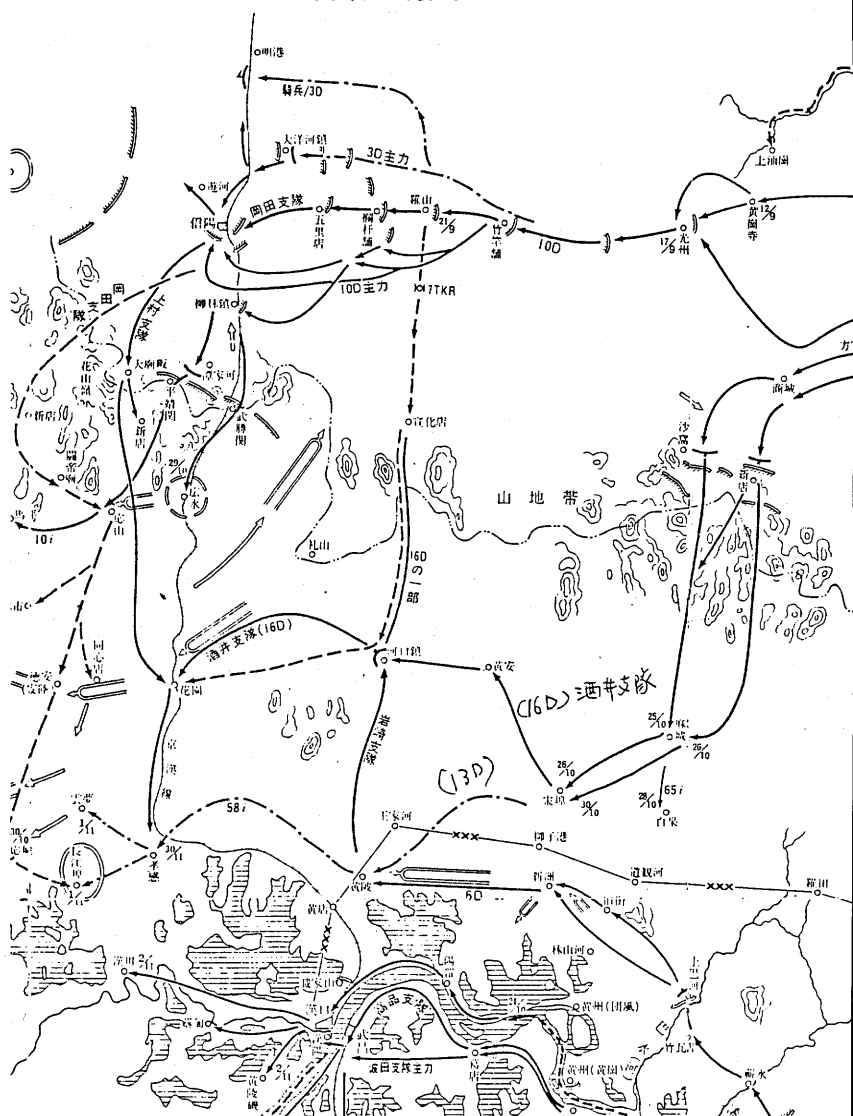
わが方は武漢攻略戦を本格的に準備したが、蒋介石軍側はどうであったか。各戦区司令官はことごとく更迭して戦力を強化し、武漢防衛のために第一戦区軍（司令長官程潜）の主力を信陽以北の京漢線以西に退避させ、徐州会戦で敗退した第五戦区軍（司令長官李宗仁）を武漢北方の大別山系に配置し、昭和十三年六月、新たに第九戦区軍（司令長官陳誠）を編成して武漢地区に配備した。第三戦区軍（司令長官顧祝同）は揚子江の湖口から下流の江南地区に配し、第五、第九戦区軍の兵力は昭和十三年七月には六十余師団に増強、武漢防衛のための大別山系瑞昌（九江西方）南北の線付近、揚子江沿岸要所には堅固な陣地を構築しつつあった。

国民政府（蒋介石）は国共合作声明をもって陳独秀、毛沢東、周恩来、郭沫若らを国民党に復席させた。また六月五日漢口で軍事会議（共産党をふくめての）を開き、漢口防衛の新作戦を発表した。

国民政府は六月九日、在漢口の各機関、中央党部、各大学に対し、重慶及び昆明等に移転を命ずるとともに自らは貴陽に脱出を企て、声明（後述）を発表、漢口を放棄、焼土と化するも徹底抗戦の構えで勝利の和平を図ったのである。

国民政府は七月六日から十日にわたり漢口で国民参政会第一次大会を開いた。この会議で共産党の抗日意見が大勢を支配し、武漢死守論、抗戦が採用されたことも、蒋介石の意図と異った方向に戦局は発展し

武漢攻略戦概観図



て行ったことになる。

蔣介石の声明（戦史叢書による）

昨夏事変勃発以来中国軍の戦闘力は増大し、大衆の士気も高揚した。上海及び山東南部における中国軍の戦った記録は、その戦闘力の優秀なることの証拠を示すものである。軍事行動において、一都市の確保あるいは放棄、または一地方における進撃後退のごときは重大視さるべきものではなく、軍が自己にとって有利なる地区を選びうる自由を保持することこそ重きを置くべきである。

今日にいたり中国国民の国民的自覚は全く全国的なものとなり、中国国民の外力に対する抵抗力は往時に数倍している。

現在戦局の重点は一特殊の都市、地域防御の成功不成功には存在しない。死活となるのは、いかにわが軍に有利な戦場を選定し、そこで敵の主力を滅殺するか能力の問題である。今後の戦闘は山岳地帯で行われ、わが軍に有利である。

中国は国家としての生存のため闘っているであり、国民が安居楽業できるため戦っているのである。もしわれわれの抵抗が成功すれば正義と人道主義諸原則は早晚実現されるであろう。この理由のため、わが国民はいっそう奮闘しなければならない。他方われわれは友好諸国がわれわれの努力を見て中国に援助を与え、その精神的義務を果たさんことを希望する。

中国に対し、国際的支援を与える旨の決議は数カ月前、連盟によって採択された。これらの決議を真面目に実行すれば、中国の断固たる抵抗によって惹起（じゃっき）される苦悩は短くすることが出来るであ

ろう。

条約の義務は中国の友好国に対し、公然と侵略に反対すべきことを要求する。もしこれらの諸国が制裁の適用に訴えるならば、それは無辜（むこ）の中国国民の苦痛を減少させるのみにならず、また将来の和平工作ならびに人間的な正義を増大するであろう。各国国民が各自国の政府に対し、日本向け武器禁輸を行い、ボイコット運動を行うことを許可すべきよう請願している事実は、侵略の犠牲者に対する同情と正義に対する公然たる支持の存在を示すものである。余は友好諸国の政府がその国民の対日制裁実行要求をこれ以上無視せざるべきを信ずる。

この声明は、漢口放棄を意味し、友好諸国の援助も期待出来なかったことを如実に物語っている。それなのに自己勢力温存のみ図ってすこぶる国民の反感を買った。このことは後述するが、南北に成立した臨時政府声明、維新政府声明に強く叫ばれているのを見れば判明することができる。

六安霍山の占領

命令に従って第十師団は第一線を金橋（六安東方二十二キ）付近に第十三師団は第一線を樁擁崗（霍山北東二十キ）にそれぞれ進め、攻撃準備を行い、軍命令によって八月二十七日から攻撃前進を開始した。第十六師団も逐次廬州地区に集結中で新任師団長も八月二十七日に着任した。

第十師団は八月二十八日、六安を占領し、第十三師団は二十九日霍山を占領した。両師団は所在の敵を撃破して西進を続け、第十三師団は九月二日葉家集を占領し、同夜葉家集西側で史河の敵前渡河を敢行、対岸に進出した。しかし八月二十九日から九月一日の間は晴天続きで、昼間は四十度以上に上昇する熱暑、

夜間は急速に冷え込む大陸性の気候は日本軍を悩ました。諸道路は徹底的に破壊され、後方補給部隊の追隨が困難なため、兵の携帯食糧の負担が増加し、給水不良も伴って多数の落後者が生じ、日射病（熱射病）の患者も多発した。

道路状況は予想通り不良で、特に六安付近の道路は根本的に破壊されており、車両部隊（砲兵、輜重、戦車）等の第一線追及は特に困難をきわめたものである。従って第十師団は所要部隊のみを駄馬編成にして第一線追及をはかり、作戦の進捗をはかったのである。

軍は交通、補給の万全を期するため、廬州―六安―葉家集―商城―光州道及び廬州―桃鎮―六安道を統制道路とし、野戦輸送指揮官に独立工兵隊、後備工兵隊、道路構築隊の全力を配備して道路補修を命じ、各師団においても道路修築隊を設けて道路の維持に努めた。降雨の時及びその後の数日は自動車運行を禁止するなど、交通統制も厳重であった。

第十三師団、富金山奪う

——第十六師団も北方地区占領——

第十三師団は九月二日夜、史河左岸に進出したが、史河西方の富金山などの峻険な地形を利用した既設陣地による敵の頑強な抵抗に遭遇した。この敵は、わが軍の西進を葉家集付近で阻止するため宋希廉の指導する中央直系の数個師団を基幹とする強力なものであった。

第十三師団は葉家集西方の敵陣地を力攻したが、敵の抵抗は頑強で師団の死傷者は千数百名に達し、落

後者（主としてマラリア）などによる消耗も多く、歩兵中隊の人員はここでも平均四十名程度の状態となった。また歩兵連隊長の被病、大隊長級の死傷も多く、戦況は容易に進展しなかった。

そこで軍は第十三師団正面に集中してきた敵を捕捉撃滅して、以後の作戦を容易にすることを企図し、九月七日第十師団に対し、有力な一部をもって敵の退路を遮断するため、武廟集もしくは方家集方面に進ませて第十三師団に協力することを命じた。

第十師団は、葉家集を経て固始に向かい、前進中の瀬谷支隊（瀬谷少将の率いる歩六三基幹）に第十三師団の作戦に協力することを命じた。瀬谷支隊は方家集方向に南下したが、樟柏嶺（方家集北方五^{キロ}）付近で二―三個師の敵と遭遇し、方家集進出は阻止された。しかし、これによって有力な敵を抑留する結果となり、第十三師団当面の敵を釘づけ出来ることとなった。

軍は九月九日、第十六師団の葉家集到着に伴い、おおむね葉家集―方家集―商城道（ふくむ）北側地区から商城方面に進軍して敵の退路を遮断することを命じ、瀬谷支隊及び砲兵一個大隊を同師団に配属した。第十六師団主力は九日、師団司令部は十日葉家集に到着した。

第十三師団は配属の独立機関銃隊、独立軽装甲車戦隊、砲兵部隊等の到着に伴い、逐次攻撃を進展し、敵陣地の要点、富金山を九月十一日夜襲攻撃により奪取、十二日朝には各陣地の要点を占領し、戦況は急速に進展したのである。

第十六師団は十二日から攻撃前進し、戦闘の進展した第十三師団とともに敵を撃破して追撃を続け、十六日商城を攻略したのである。

第十六師団（瀬谷支隊は商城占領とともに第十師団に復帰）の篠原支隊（篠原少将の率いる歩兵三個大隊、野砲一個大隊基幹）は、九月十八日沙窩（商城南西二十五^キ）南方地区を占領し、第十三師団の沼田支隊（沼田重徳少将の指揮する歩兵六個大隊、山砲一個中隊基幹）は新店（商城南方二十^キ）北方地区を占領した。

固始・光州の攻略

第十師団の岡田支隊（岡田資少将の指揮する歩三九、歩四〇各主力基幹）は八月二十八日六安を占領し、翌二十九日夜、六安西側で淖河を強行渡河して固始に向かつて突進し、支隊は悪路を克服して九月三日石仏店に達し、四日未明同地付近で史河を渡河して四日、南大橋を攻略した。支隊は五日、固始外周の敵を撃破し、六日朝から固始城の攻撃を開始、同日夜完全に占領した。

岡田支隊は固始に一部を残置し、七日から光州に向かつて追撃を開始し、所在の敵を撃破して九月十二日黄崗寺に進出した。このころ支隊の糧食は欠乏し、マラリア患者は多発、戦死傷者も多く生じた。

第十師団主力（歩一、砲兵主力等）は所在の敵を撃破し、悪路を克服して九月十四日黄崗寺付近に進出して岡田支隊に追及し、光州攻撃を準備した。

九月十五日から行動を開始し、歩兵の一部と砲兵の主力をもって本道沿いに東方から、師団主力は光州北方を迂回して北西方からそれぞれ光州を攻撃し、十七日同地を占領した。光州付近に所在した敵は第二八、第六一、第一八〇師、騎兵第九師等で退路を遮断され、多数の車両等を放棄して敗走して行った。

光州、商城付近進出までの第二軍の戦果は敵の遺棄死体約一万二千、俘虜約四百五十、ろ獲品は迫撃砲

十三、重機十四、輕機八十五、自動車三などと報告されたが、わが損害も戦死約五百五十、負傷者約二千名で、決して勝利の戦闘ではなく、全くの互角、優勢な地の利を得た敵に苦戦を重ねたのは、わが第三十三連隊の詳述と同じで、大別山の北方に迂回すべく急進している第十師団であり、深く頭を下げるものである。

羅山占領

第十師団は光州占領後、直ちに岡田支隊（歩兵四個大隊、山砲一個大隊基幹）に羅山方面への追撃を命じた。岡田支隊は直ちに進撃に移り、九月十九日竹竿舖（羅山東方十_{キロ}）付近の敵を撃破して、夜間追撃を実施し、二十日未明から羅山東方台地の敵陣地の攻撃を開始した。

羅山周辺の敵の抵抗はいっそう頑強で岡田支隊は多数の死傷者を生じたが、夜間も攻撃を続行した。二十一日未明にいたり、敵が退却を開始したので、支隊は敵を急追して二十一日午前羅山を完全占領。

しかし敵はこの奪回を企図し、九月二十二日から反攻を開始、数個師の敵が羅山の西方、北方、南方から連日攻撃してきた。岡田支隊は羅山を中心として各方面の敵を反撃し、連日多忙を極めた戦闘であったが、これを確保し、一步も譲るところがなかったので、九月二十八日以降は、敵もようやく消極的になった。

第十六師団も攻略に参加

——第十師団、遡江輸送で活路——

第二軍正面の敵兵力増加

第二軍は作戦行動開始前においては、当面の敵兵力を第五戦区左翼兵团（長・孫連仲）である孫連仲、張自忠、馮治安軍など十個師余と判断していた。軍が光州、商城の線に進出するところには干学忠軍の二個師、中央直系の宋希廉の三個師、胡宗南軍の約三個師など十数個師を増加してきている。

九月十五日付の孫連仲の命令により、張自忠軍及び孫連仲軍は光州及び商城を確保して日本軍の西進を阻止し、この間に胡宗南は胡宗南軍、四川軍、野砲一団、戦車一団を率いて九月二十日までに信陽付近一帯に集中する徴候がわが軍に察知出来た。

折から中支那派遣軍より第二軍に対し、武漢攻略のために急を要する信陽攻略、京漢線確保の命令が下達されてきた。派遣軍は第十一軍、特に第六師団の広濟方面への進出状況等を觀察し、九月六日一部は大別山系の中央を突破して急拠漢口北方地区へ、また主力は信陽へ進出するよう下命してきた。

中支作命甲第七十九号（抜粹）である。

（一）大別山北廬における第二軍の前進は迅速に進展中にして揚子江南岸における第十一軍の集中も、また廬山（九江寄り）周辺の頑敵を撃破し、おおむね予定のごとく進撃しつつあり。

（二）略す。

(三) 第二軍は適時光州、商城の線より前進を続行し、一部をもって大別山山系を突破し、第十一軍の揚子江北岸部隊と策応して漢口北側地区に向かって前進させ、主力をもって信陽方面に進出し、敵を求めて攻撃すべし、また速やかに京漢線を遮断すべし。

(四) 第十一軍は依然任務を続行すべし。

(五) 航空兵団は前任務を続行すべし。特に京漢線方面、就中信陽付近の敵情を速やかに搜索し、かつ京漢鉄道の遮断につとむべし。

(六) 予は南京軍司令部にあり。

この派遣軍命令に基づき、大別山系を突破して南下させ漢口を攻略する兵団を第十三師団だけと予定していた。ところが第十三師団の戦力は極度に低下（幹部の損耗が多く、歩兵中隊のごときは平均兵力約四十名となっている）しており、このため第十六師団も大別山系を突破し、漢口攻略作戦に参加することになった。

軍の第一線兵団（師団）が光州、商城の線に到着の機が迫った。九月十五日、速やかに大別山系を突破して武漢平原に進出、広済方面の敵退路を遮断することに決し、第十六師団に白果（宋埠東方二十五キロ）方向への前進をそれぞれ準備すべきことを命じ、ついで十九日両師団は九月二十二日以降、随時進発することを命じた。

第十師団に対しては適時光州を発進し、信陽を攻略することを命じ、第三師団に対しては兵力を光州付近に推進して、随時軍当面の戦闘に参加する準備を命じた。

道路の不良と淮河遡江輸送

九月十七日から二十二日の間は小雨が降り続き、道路は泥濘（でいねい）化した。このため車両の交通は不能となったため、各部隊の補給は不十分となり、主力部隊の発進は延期しなければならない状態となった。

九月二十三日から天候が次第に回復し、二十五日から各所に待機していた数百両の自動車（第二軍の自動車総数は約四千両）は逐次活動を開始、第一線の前進準備も進展した。

第二軍の作戦開始前、陸路兵たん線が遠長となるに従い、補給が困難となることを予察し、淮河を利用、遡江輸送を考え、約六百隻の漁船（大部分は日本から）を準備し、蚌埠所在の兵たん部隊（特に歩兵第六連隊の一個大隊等）を配属し、補給を担任させていた。

歩兵第六連隊（名古屋）第三大隊長の指揮する第一次遡江輸送部隊（百数十隻）は八月三十一日、蚌埠を出発し、途中沿岸の敵の妨害を排除しつつ前進し、九月八日上油崗（光州北東二十五き）付近に到着、第十師団の光州作戦に協力した。第二次遡江部隊は十月上旬に光州付近に上陸した。

前述したように折から降雨による交通途絶時であったので、遡江輸送は光州及び商城付近進出部隊に対する唯一の補給源となり、作戦を有利に導いたことはいふまでもない。

揚陸点からは主として駄馬によって輸送された。九月二十日ごろまでに上油崗に揚陸された軍需品は、食糧約一個師団の三十六日分、馬糧約一個師団の二十一日分、弾薬一個師団の三十三日分という多量である。

マラリア患者が続発したが、各部隊とも衛生材料、医薬品が極度に不足し、第一線部隊には皆無の状態だったので、連絡飛行機に対して、兵隊による人文字で「クスリ」と書いて合図し、緊急を訴えた部隊もあったという。

現地物資の収集は、作戦当初は困難であつたが、信陽付近に進出したところには、塩との交換によつて相当量の隠とく米を収集することが出来、また各部隊は副食物として沼や川から爆破による魚類を採集、利用した。

こうして第十師団は、主要部隊を駄馬編成、九月二十八日光州を進発した。

羅山地区において、胡宗南の率いる中央直系軍を基幹とする数個師の敵が岡田支隊の両翼を包囲する態勢にあつたので、第十師団は主力を羅山南方地区に注ぎ、敵の右翼を猛攻した。二十八日夜になって敵が後退を開始したので、師団主力は羅山を占領、以後の攻撃前進の準備をした。

悪路、複雑地形を前進

——第三師団、京漢線に到達、遮断——

第十師団主力は九月三十日、羅山付近から南西方に向かつて攻撃前進し、所在の敵を撃破して信陽南方地区に進出した。ついで十月六日夜、一部をもって柳林鎮（信陽南方二十キ）付近で京漢線を遮断し、同地付近に一部を残して師団主力は十月福日信陽南西側高地に進出した。

羅山の岡田支隊当面の敵は頑強な抵抗を続けたが、十月二日夜半になって退却を開始した。岡田支隊（歩

兵第四十連隊基幹）は敵を追撃して西へ進んだ。歩兵第三十九連隊は岡田支隊から除かれ、羅山付近の警備に任じていたが、廬州出發當時は二千八百名もいたのに、死傷及び患者（マラリアの続発）の増加でこの頃は八百名以下に減少していた。

第二軍は十月二日、光州付近に到着しつつある第三師団（師団司令部は十月一日光州到着）に対し、速かに羅山北方地区に兵力を推進、第十師団に策応して敵主力を撃滅すべきことを命じた。安慶―蕪湖間は揚子江沿岸の警備に任じていた歩兵第六十八連隊主力は、十月六日光州に到着して第三師団長の指揮下に復帰した。

軍は十月六日、信陽に向かって進撃中の岡田支隊と戦車第七連隊（連隊長・岩仲義治大佐）を第三師団に配属した。

第三師団主力は、悪路と複雑な地形を克服して敵を撃破しつつ前進し、十月九日大洋河鎮（信陽北東十五キ）付近に進出した。さらに西進、十月十一日京漢線に到達、これを遮断した。

一方岡田支隊は羅山―信陽道に沿う地区を西進し、欄杆舗（羅山西方十キ）付近及び五里店（信陽東方二十五キ）付近の頑強な敵を砲兵（野砲及び野戦重砲）の協力を得て逐次撃破、十一日夕信陽東側に進出した。このころ第十師団主力は信陽南側に進出していた。また十二日、戦車の障害物突破を利用し、砲兵の支援下に信陽を攻略した。

第三、第十師団は信陽地区の残敵を掃討し、京漢線を制して主力は逐次信陽付近に集結した。信陽攻略戦におけるわが損害は戦死約五百五十名、負傷約千五百六十名であり、敵の遺棄死体は一万三千人。

漢口方面南下の派遣軍命令

派遣軍は十月十二日、次の命令で第二軍の漢口方面南下を命じた。

中支作戰甲第百十七号（十二日）

(一) 軍の作戰は各方面有利に進展し、敵の戰勢は逐日著しく減退しつつあり。

(二) 軍はさらに京漢線方面より一部を進めて武漢攻略の包囲圈を収縮し、前企图を遂行せんとす。

(三) 第二軍は信陽付近の敵撃破後一部をもって同地付近を確保し、漢口西北地区に進出せしめ、麻城方向に進出すべき部隊を相まちて江北における当面の敵を撃滅し、かつ漢口及び漢陽を攻略すべし。一部を速やかに窩河（漢水）の線に進出せしめ敵の退路を遮断すべし。

(四) 第十一軍は依然前任務を続行すべし。特に江北部隊をひそかに第二軍に連係せしむべし。

(五) 兩軍作戰地境は当分現在のままとし、武漢三鎮直接進入は別命によること。

(六) 航空兵団は前任務を続行するほか敵後方の移動を監視し、機宜に応じ四方及び、西南方包囲圈外にて敵の退路を遮断すべし。（以下略）

敵の攻撃に苦戦

——防戦に努めた援護部隊——

信陽からの南下

信陽攻略のころ、敵は南方から列車によって兵力を信陽方面に増加しつつあって、第十師団は京漢線遮

断（十月六日）後は、柳林鎮付近に側背援護部隊（独立機関銃第二大隊主力、歩兵四個小隊基幹）を残して信陽南側に前進した。

援護部隊は十月七日から連日優勢な敵の攻撃を受け、防戦に努めた。第十師団は十二日、歩兵第六十三連隊第三大隊を増援に派遣して歩兵第四十連隊長に援護部隊を合わせ、指揮させた。同方面の敵の抵抗は頑強であった。

第二軍は派遣軍命令に基づき十月十二日、第十師団（岡田支隊復帰）に対し、京漢線以西の地区をまず徳安（漢口北西百キロ）への急進を命じ、第三師団に信陽付近の確保を命じた。

第十師団は平靖関付近の要衝を突破することを企図し、同方面に進出している騎兵第十連隊に歩兵第十連隊を増加して、平靖関の突破の部署についた。

歩兵第十連隊の一個大隊は十月十六日、連隊主力は十七日信陽を出発した。第十師団主力の前進はやや遅れる事情にあった。

このため、軍は十月十七日、第三師団に対し、歩兵三個大隊を基幹とする部隊をもって、平靖関西方河谷を応山（信陽南西六十キロ）方面に攻撃前進させ、第十師団の平靖関突破に協力することを命じた。

第三師団は上村支隊（上村幹男少将の指揮する歩兵三個大隊、砲兵一個中隊基幹）を派遣した。同支隊は十月十八日信陽を出発した。

歩兵第十連隊は十八日から潭家可（平靖関東方十キロ）南方の敵陣地の攻撃を開始したが、敵の抵抗は頑強で死傷続出して戦況は進展しなかった。

上村支隊は十九日から大廟敗（平靖関西方五^ギ）付近の敵を攻撃し、苦戦のすえ、二十一日に一部（歩兵第六十八連隊の半個大隊）が省境を突破して同日夜、新店（平靖関南南西十^ギ）付近に進出した。

第十師団の瀬谷支隊（先行の歩兵第十連隊、騎兵第十連隊等に歩兵第六十三連隊の一個大隊増加）と岡田支隊（歩兵第三十九連隊主力、歩兵第四十連隊第一大隊、独立機関銃第二大隊主力、独立山砲兵第三連隊の一部、臨時山砲兵中隊、工兵一個小隊基幹）の一部は二十日信陽を出発し、岡田支隊主力、師団司令部、歩兵第六十三連隊主力は二十一日信陽を出発した。

岡田支隊（騎馬編成に臨時改編）は平靖関西方地区をう回し、峻剣な地勢を克服して強行軍を続け、二十二日省境を突破して南進した。

岡田支隊の歩兵第三十九連隊の陣中日誌は、その前進状況を次の通り記述している。

十月二十二日作戦計画に基づき花山に向かう。道路は幅一^ギ足らずの山道にして河川には橋梁なく、臨時駄馬編成のため各部隊ともに絶大なる労苦のち十八時花山に達す。支隊長はさらに前進を欲し花山南方二里（八^ギ）馬沖付近に向かう。部隊は暗中急峻なる山道を這い三^ギ余の懸崖をよじのぼり七転八起ほとんど不可能事に近い行軍を敢行し二十三時部隊の集結を完了せり。馬匹の損傷甚大なり。

十月二十二日、軍は京漢線方面の敵が全面的に退却しつつある状況を知り、さらに兵力を増加してこれを捕捉することに決め、第十師団に対し、平靖関一^ギ山道以西の地区を応域付近に突進することを命じた。また第三師団に対し師団主力をもって第十師団に追隨して花園方向に突進し、信陽付近は歩兵第二十九旅団長上野勘一郎少将の指揮する歩兵三個大隊、砲兵二個大隊基幹の部隊をもって確保することを命じた。

第三師団長は、信陽付近に所在した歩兵第十八連隊を十月二十三日出発させ、上村支隊に追及増加した。ところが桐柏（信陽西北西五十キロ）方面に退却した胡宗南軍が出撃を企図しているとの情報があった。

第二軍は二十四日、第三師団長の南進中止を命じ、桐柏方面の敵を迎撃することを命じた。

第三師団長は二十四日、機先を制して信陽付近の部隊をもって遊河（信陽北西十五キロ）付近の敵先鋒部隊を撃破した。この際羅山から信陽に追及中の歩兵第六連隊主力で駱駄店（信陽南西五キロ）を占領させた。敵を攻撃した反応状態から、桐柏方面の敵は積極的行動に出ないものと判断された。

軍は十月二十六日、第三師団長の南下を命じ、第三師団司令部及び歩兵第六連隊主力は翌二十七日信陽を出発して南下した。

第十三師団、残敵を撃破

——第十六師団も攻略し追撃——

大別山系突破のわが第三十三連隊の戦闘状況は前述の通りその実相を述べてきた通りだが、師団全体及び友軍第十三師団の概要にふれておきたい。

第二軍は九月十五日、第十三、第十六師団に大別山系の突破を下令し、両師団は商城占領直後の九月十七日、先遣隊を派遣し、第十六師団の篠原支隊が九月十八日、沙窩南方地区に進出し、第十三師団の沼田支隊が十九日新店北方地区に進出した。

篠原支隊、九月二十日から沙窩南方大別山系の敵を攻撃したが、敵の抵抗は頑強で攻撃は大きくは進展

しなかった。そのうえ、二十五日以来新たな敵が沙窩北方から支隊の背後を攻撃してきて、補給路の商城―沙窩道も脅威をうけた。

第十六師団主力は商城地区で前進準備中であつたが、天候の回復で補給のメドがついたので九月二十七日商城付近を出発し、まず篠原支隊背後の敵を撃破して沙窩地区に進出した。第十六師団は主力進出とともに攻撃を準備し、十月六日から大別山系の敵陣地の攻撃を開始した。沙窩南方には標高九〇〇呎前後の険しい山々が重なり、敵は堅固な陣地を構築していた。

第十六師団の攻撃は、天候不良のため、砲兵の射撃は妨げられ、歩兵の斜面登上も困難を極め、十月九日一部の要点を占領したのみで、戦線はこう着した。

第十三師団の沼田支隊は九月十八日、新店北方に進出して、新店占領を企図した。新店北方地区の山地に拠る敵の抵抗は頑強で、支隊の進出は阻止された。第十三師団主力は九月二十九日商城地区を出発し、新店北方地区に進出して沼田支隊を掌握して攻撃を準備した。

第十三師団は十月三日から総攻撃を開始し、山地の陣地を逐次攻略して十月八日夜新店を占領した。師団は攻撃を続行したが、敵陣地の攻撃は難航した。ようやく十月二十一日に陣地要部を攻略し、二十二日省境を越え、残敵を撃破しつつ南下して二十六日麻城北東地区に、ついで十月三十日宋埠に進出した。

第十六師団は天候の回復とともに十月十五日から総攻撃を開始し、頑強な敵陣地を逐次攻略して、二十四日省境を越えて追撃に移り、二十五日麻城地区に、二十六日宋埠地区に、二十七日には黄安に進出した。これより先の十月二十一日、軍は後方警備に任じていた歩兵第十九旅団司令部及び歩兵第二十連隊主力

を第十六師団長の指揮下に復帰させた。十月中旬における第十六師団は、第一線歩兵中隊の戦死傷者が多く、歩兵第三十三連隊には中隊長以下十三名という中隊も生じた。

また第二軍は十月二十四日、第十三師団に対し、主力をもって黄陂（漢口北方三十五キロ）北方地区に向かう追撃を、第十六師団に対し、河口鎮（黄安西方二十キロ）方面への追撃をそれぞれ命令した。

軍はついで二十七日、第十三師団に対し、一部を孝感付近の京漢線に向かい突撃させ、師団主力は宋埠付近を根拠として白果（宋埠東方二十キロ）方面へ敗敵を撃滅すべきことを命じ、第十六師団に対し、一部を花園付近の京漢線に向かい突撃させ、師団主力は黄安付を根拠として礼山（河口鎮北西二十五キロ）及び宣化店（黄安北方三十キロ）付近の敗敵を撃滅すべきことを命じた。

大別山系突破作戦における第十三、第十六師団の損害は戦死約一千名、負傷者三千四百名であり、敵に与えた損害は遺棄死体約一万五千人と報じられた。

地歩を広済、瑞昌へ

——第十一軍、8月中旬の作戦構想——

波田支隊は七月二十六日、九江を占領したが、同地にコレラが発生し、防疫のため同支隊の瑞昌方面への作戦発起は遅れていた。

大本営陸軍部第三課長綾部橋樹大佐は八月一日、湖口の第十一軍戦闘司令所を訪れ、広東作戦実施のために、波田支隊の救出が出来るかどうか、あるいはその時期などについて連絡した。これに対し第十一軍

は漢口攻略完了時機については目下明確な目途はなく、転進などの風評は波田支隊の今後の行動に悪影響を及ぼすので、抽出の件はいっさい打ち切りとして欲しい旨を強く要望した。

第十一軍は八月三日、戦闘司令所を九江に推進した。九江飛行場は敵の揚子江堤防決壊によって浸水し、使用不能となっており、軍の作戦連絡に多大の支障を来たした。軍は九江対岸の二套口付近飛行場適地を求め、設定に着手し、八月二十三日から使用可能となった。この飛行場は逐次整備され八月末から漢口作戦間は第三飛行団の主力飛行場となった。

第十一軍は八月上旬、波田支隊の前進遅延、第百六師団の九江南方地区の攻撃停滞、第九・第二十七・第百一師団の前線進出の遅延、北岸の第六師団の前進困難などから、漢口攻略の遅延を憂慮、焦慮しつつあった。

軍は八月十三日、次の会戦準備要領を決定、その後の作戦準備を進めた。これによって八月中旬における第十一軍の作戦構想がうかがえる。

会戦準備要領（八月十三日呂集團参謀部）

方針

一、軍は後続兵団の到着に伴い、地歩を広済、瑞昌、德安、永修の線に進め、以後の作戦を準備す。

要領

二、第六師団はその右側面の敵を掃討し八月二十五日ごろ黄梅付近を進発し広済付近を攻略して以後の作戦を準備す。以後速やかに一部をもって海軍と協力し背面より田家鎮を攻略す。九江方面よりする側方補

西井支隊

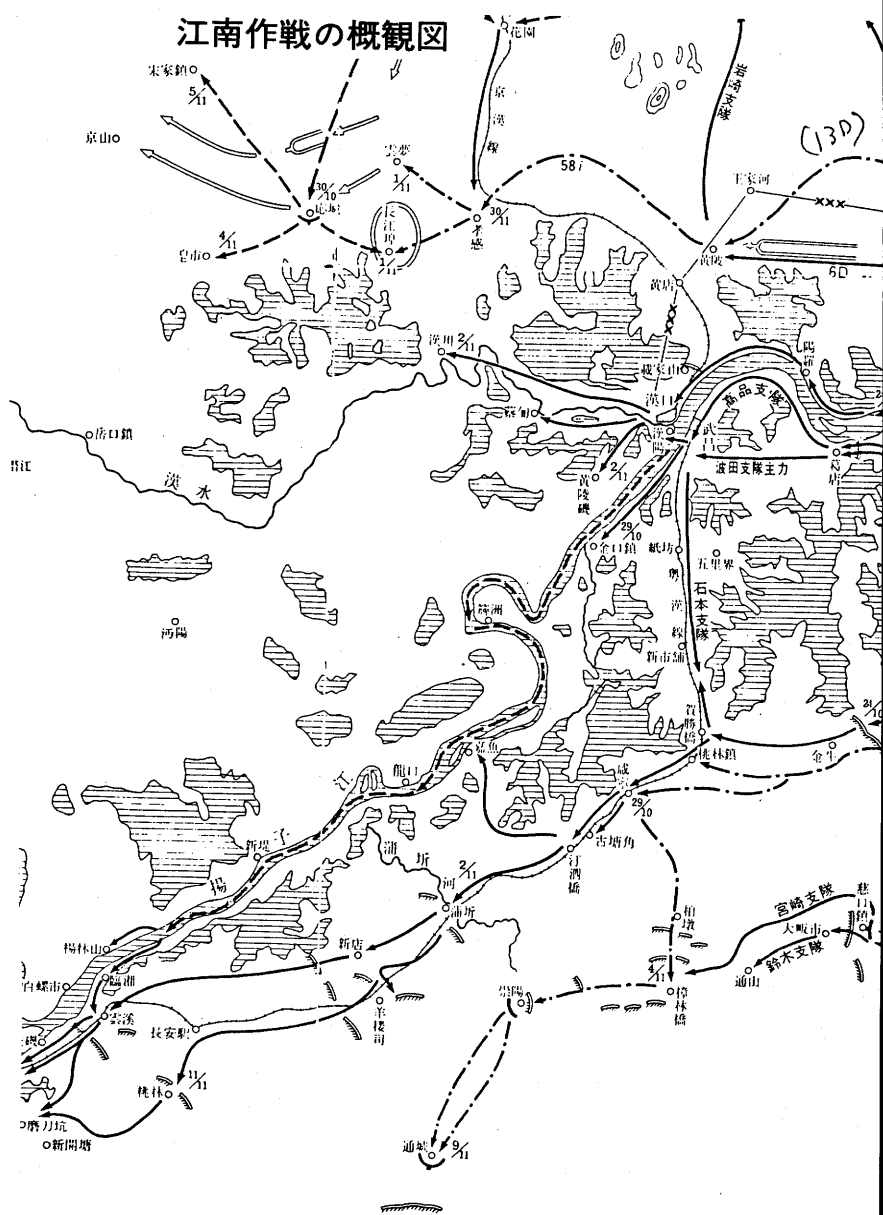
山 地 帯

山脈
標高
分地



江南作戰の概観図

第十二章 徐州会戦から武漢三鎮占領の概観



給確立するに至れば安慶よりする後方補給路はこれを撤去す。

三、波田支隊は一部をもって丁家山（瑞昌東方）付近要地を確保し、主力は八月二十日ごろ、九江付近を進發してまず瑞昌北方地区に進出し、江岸にそう以後の作戦を準備す。

四、第九師団は九江付近に上陸しまず同地東南方地区に兵力を集結す。その先頭梯団をもって八月某日頃九江出發、瑞昌付近に進出し陽進方面に向かう前進を準備すると共に機を失せず一部をもって第百六師団方面の作戦に協力のため瑞昌―德安道方面に向かう前進拠点を獲得せしむ。以後の主力は逐次瑞昌付近に進出し、作戦を準備す。

五、第百六師団は、おおむね現態勢をもって戦力回復を図ると共に以後の攻撃を準備し、八月下旬瑞昌及び星子方面よりする第九師団及び第百一師団の各一部と策応し当面の敵を廬山西南地区に捕捉す。有力なる一部をもって德安方向に敵を追撃せしむ。

六、第百一師団は佐藤支隊をもって八月二十日頃星子を攻略し、逐次兵力を該方面に推進して八月下旬德安を攻略す。以後第二十七師団到着に伴い、これと策応し永修を攻略す。

七、第二十七師団は星子付近に上陸し、まず德安に向かい前進し、有力なる一部をもって第百一師団と策応し、永修西北方地区に進出したる後、德安及び虬津街に兵力を集結して修水河谷に沿う以後の前進を準備す。

協同して瑞昌を攻撃

——第九師団、丸山、波田の両支隊——

瑞昌攻略

第十一軍は、第九師団の先頭部隊が八月十六日九江に進出したので、同日次の瑞昌攻略に関する命令を下達した。

第十一軍作命第二十六号（抜粋） 〓八月十六日（一、二略）

三、波田支隊はなるべく速やかに丁家山前面の敵を撃破して瑞昌付近を攻略し同地西方地区に進出すべし。
四、第九師団は上陸に伴い、逐次兵力を九江東南方地区に集結し瑞昌付近に向かう前進を準備すべし。特に有力なる一部をもって全力の集結に先立ち瑞昌付近に進出するの準備にあらしむべし。

五、独立工兵第三連隊は前任務を続行すると共に波田支隊及び第九師団の前進に協力すべし。その一中隊を八月十九日波田支隊長の指揮下に入らしむべし。

波田支隊は八月十日、歩兵約一個中隊を先遣させて望天山（九江西方二十キ）を、十二日には歩兵一個大隊、山砲一個中隊基幹の部隊を派遣して望天山南側の丁家山を攻略した。波田支隊主力は八月十九日九江を出発し、敵を撃砲しつつ前進し、二十三日には瑞昌の北方及び北東方約四_キ付近に進出した。

軍はこれより先の八月二十一日、第九師団の約半分を瑞昌から徳安北方に南下させて廬山西麓の敵の退路を遮断することに決し、次の命令を下達した。八月十五日の情報によれば廬山地区の敵兵力は三十余個

師であつた。

第十一軍作命第三十四号

第十一軍命令（八月二十一日、於九江）

一、波田支隊は本二十一日早朝丁家山付近を發し、当面の敵を攻撃中にして、佐藤支隊は本払曉星子を攻略し、引続き敵を攻撃中なり。第百六師団当面の敵情変化なし。

二、軍は廬山西麓の敵を撃滅して地歩を西方に進め、以後の作戦を準備せんとす。

三、波田支隊は瑞昌付近攻略後武山（瑞昌北西）の線付近に進出し、先ず第九師団の瑞昌付近進出を容易ならしめ、もつてなるべく速やかに馬頭鎮を攻略すべし。

四、第百六師団は第九師団一部の攻撃進展に伴い、当面の敵を攻撃すべし。攻撃前進の時機は別命す。

五、第九師団は速やかに歩兵約五大隊、山砲約一大隊を基幹とする部隊をもつて瑞昌付近を経て所在の敵を撃破し、德安北方地区に向かい前進し、廬山西麓の敵退路を遮断すべし。以後の主力は速やかに瑞昌付近に集結し、陽新方向に向かう前進を準備すべし。（以下略）

この命令に基づき、第九師団は丸山支隊（歩兵第六旅団長丸山政雄少將の指揮する歩兵第七、第三十五連隊、山砲一個大隊基幹）を八月二十一日九江を出發させ、主力はこれに続行した。

丸山支隊は二十四日瑞昌付近に進出し、波田支隊の左翼に連係して瑞昌を協同攻撃し、同日午後攻略した。

波田支隊は瑞昌北西方に攻撃前進し、丸山支隊は德安北方に向かう攻撃前進を準備した。

波田支隊の台灣歩兵第二連隊第二大隊は支隊主力から分離して八月十九日九江を出発し、揚子江南岸と赤湖の中間地帯を馬頭鎮（瑞昌北北西十八ギ）に向かい前進した。同地帯は長さ約二十ギ、幅約一ギにも足りない帯のような地峡で、敵による揚子江堤防の決壊により、道路が削られたところもあり、敵の抵抗もあつてう回路はなく、苦戦を続けた。永井大隊は煙幕を有効に利用するなどして、逐次敵を撃破し、約一カ月後の五月十四日海軍の協力を得て馬頭鎮までの揚子江が開かれた。

田家鎮攻略が急務

——第六師団反撃かわし広済進出——

德安北方への前進

第百六師団は廬山西方地区で敵と相對し、戦力の回復を図りつつ攻撃を準備した。

軍は第百六師団の戦力増強のため、八月四日追撃第一大隊（一個中隊欠）八月十九日野戦重砲兵第十連隊（二個中隊欠）を同師団に配属した。

軍は瑞昌攻略に伴い八月二十五日、既報の呂集作命第三十四号による第百六師団の攻撃前進時機を八月二十七日とする旨を下令した。第百六師団は所命のごとく八月二十七日から攻撃を開始した。敵の攻撃は頑強であつたが、丸山支隊の進出もあつてか、九月一日から攻撃は進展し、九月二日から追撃に移った。

第九師団長は八月二十六日瑞昌に進出し、丸山支隊に德安北方へ南下を命じ、歩兵第三十六連隊に瑞昌南西方の敵を攻撃させた。丸山支隊は八月二十九日朝、瑞昌南方から攻撃前進し、所在の敵を撃破しつつ

瑞昌―徳安道に沿う地区を南東進し、二十九日夕には岷山（瑞昌南東十五^キ）付近に達し、九月三日午後には馬廻嶺に進出した。丸山支隊は八月二十六日歩兵一個大隊、二十九日歩兵一個大隊及び山砲一個大隊の増加をうけ、支隊兵力は歩兵六個大隊、山砲二個大隊基幹となった。

第百六師団の追撃隊も九月三日夕、馬廻嶺に達し、続いて南方への前進を準備した。

軍は九月三日、次の要旨命令の電報を発した。

第十一軍作命第四八号の要旨

一、第百六師団は馬廻嶺付近に進出、馬廻嶺、曹家坂（馬廻嶺西北約七^キ）付近の地区に兵力を集結し、以後の作戦を準備すべし。

二、第九師団は第百六師団の馬廻嶺進出に伴い、丸山支隊を主力方面に招致するとともに陽新方向に向かう前進準備を促進すべし。丸山支隊の転進行動は之を秘匿することに努むべし（以下略）

三、第百一師団は前任務を続行すべし。

丸山支隊を馬廻嶺から第九師団主力方面に反転させた理由は第九師団の西方前進を促進しようとしたものである。第百六師団は馬廻嶺付近に進出したが、八月二十七日以来の攻撃で再度の大損害を受けて戦力は低下しており廬山東麓地区の第百一師団の攻撃は進捗していないため、徳安攻略は丸山支隊の負担となる見込みが大きくなると軍は判断したのであった。丸山支隊は九月八日瑞昌に帰還した。

第百一師団の佐藤支隊（歩兵二個大隊基幹）は八月二十一日払暁海軍と協力して星子を攻略した、以後第百一師団（歩兵五個大隊基幹）は廬山南麓の敵を攻撃したが、敵の抵抗は頑強で、攻撃は進展しなかつ

た。

広済攻略

田家鎮要塞は九江上流約六十^キの揚子江北岸に位置し、対岸の半壁山及び富池口の永久砲台と相まって武漢三鎮の関門であり、遡江作戰を進捗させるためには速やかに攻略する必要があった。田家鎮要塞は背後の陸路から攻略することが有利で、かつ迅速と考えられた。

第六師団は八月二日、黄梅を攻略したが、以後の前進は容易でなかった。安慶―潜山、黄梅の兵たん線を撤去して側方補給に切りかえた。これに伴い、第六師団は兵たん警備兵力を逐次前方に推進した。

軍は八月二十三日、「第六師団は八月三十一日黄梅付近を進発し当面の敵を撃破して広済付近に前進し、作戰を準備すべし。広済付近進出に伴い、速やかに有力なる一部をもって田家鎮付近を攻略し、艦艇の遡江を容易ならしむべし。海軍航空部隊はこれに協力するはず」と下令した。

黄梅―広済間は約三十^キで、数線の陣地が縦横に配備されており、広済方面所在の敵は約八個師と推定された。八月二十二日、「蒋介石は十三日第五戦区に対しまず黄梅を攻撃し、ついで宿松、太湖方面に攻撃することを命令せり」との情報が入った。

第六師団は牛島支隊には黄梅―広済道に沿う地区を、今村支隊には牛島支隊の南方地区をそれぞれ広済に向かつて攻撃、前進することを部署した。

西支隊は八月三十日払暁から攻撃前進し、逐次敵陣地を攻略突破して、牛島支隊は九月六日午後広済城を占領し、今村支隊は広済南側地区に進出した。

この間、歩兵第十三連隊は師団予備となり、第一線の後方を前進したが、北方から、わが右側背に攻撃してくる敵を数次にわたり反撃し、東奔西走の戦闘行動をとり、広済占領後は主力をもって黄梅―広済間の後方警備に任じた。

広済奪回を企図する敵は執拗に広済正面及び側背に反撃してきた。第六師団は敵を撃退しつつ、以後の作戦を準備した。

後方部隊は防戦一方

——今村支隊主力は主陣地を攻撃——

田家鎮要塞の攻略

第六師団は田家鎮要塞攻略のため、今村支隊（今村勝次少将の指揮する歩兵第十三連隊、独立山砲兵第二連隊主力、輜重兵第六連隊第二中隊、衛生隊三分の一、第一野戦病院）を編成した。同支隊は田家鎮方面の地形を考慮し、臨時にダ馬編成に改編した。同作戦は約一週間と見積って作戦資材を準備した。

田家鎮要塞の敵は中央軍の二個師を主体とし、要塞の背面（北側）にも堅固な陣地が設備されており、田家鎮北々西約十五^ギの蕨春付近には敵約二個師がいるという情報であった。

今村支隊は九月十五日朝、広済付近を出発して鉄石檉付近の敵を撃破し、同日夕刻松山口付近に進出した。松山口南側の高地一帯（標高三百^ギ前後）は要塞の前進陣地であった。支隊は十五日夕刻から前進陣地の攻撃を開始したが、敵の抵抗は頑強であった。支隊は十六日も攻撃を続行したが攻略できず、同日夜

には右側背から敵の攻撃をうけ、後方部隊は防戦する状況となった。

今村支隊は歩兵第十三連隊（隊長・中野英光大佐）の第三大隊（渋谷）を松山口南側高地帯に配置して側背援護にあて、主力をもって十月十八日から主陣地の攻撃に着手した。

九月十七日夕から雨が降りはじめ、十八日には豪雨であった。悪天候は二十一日まで続き、交通を妨げ、歩砲の協同を困難にし、飛行機の協力も制約された。

支隊主力前面の敵主陣地には二線の鉄条網があり、要点にはペトン製のトーチカが設備されており、しかも陣地は数線にわたる堅固なものであった。

十八日夕から、支那側背に対する敵の攻撃は活発化し、十九日には蕪春方面から約二千の敵が新たに増加し、渋谷大隊は苦闘を続けた。支隊長は後方部隊で小銃部隊を編成して防御に任じさせた。二十日側背の敵はますます増加し、死傷続出して危険な状態となり、支隊長は主力から歩兵中隊を抽出して後方方面に増援し、山砲中隊などで支援させた。激戦のため支隊の弾薬、医療品は極度に不足してきた。前方の田家鎮要塞からの砲撃もあり、支隊は三方から包囲攻撃をうけ、東方の湖沼地帯だけが開放されていた。

第六師団主力は、広済地区で、連日連夜のごとく反撃してくる敵を撃退しつつあった。今村支隊の苦戦を知った師団長は救援のため九月二十日朝歩兵第四十五連隊第二（山本）大隊を派遣したが、同大隊は四望山付近で敵と遭遇し、南下を阻止された。師団はさらに二十一日夜、歩兵第二十三連隊第二大隊長池田少佐の指揮する歩兵四個中隊、山砲二個中隊、工兵一個小隊、輜重兵一個中隊等の混成大隊を派遣したが、これもまた敵のため阻止された。

主陣地攻撃の第一、第二大隊は二十日及び二十一日の夜間攻撃によって主陣地の一角を奪取した。支隊側背においては二十一日、二十二日と苦闘が続いた。二十一日午後、雲の切れ間から医療品及び山砲彈百発が空中投下によって支隊に補充されてやや愁眉を開いた。

今村支隊長は二十二日、増援部隊を救援、誘導するため、第二大隊長渋谷少佐の指揮する混成大隊（歩兵三個中隊、速射砲中隊）を松山口東方から鉄石檜方面に派遣した。混成大隊は所在の敵を撃破して山本大隊と連絡し、増援部隊は二十四日夜から二十六日にかけて支隊主力と合した。

敵は日本軍の進撃を阻止するため、武穴鎮の下流約六_キ付近の揚子江堤防を破壊した。このため、武山湖、黄泥湖一帯ははんらん状態となっていた。武穴鎮は九月十七日海軍の陸戦隊によって占領されていた。

田家鎮の入城に成功

——岡山大隊池田大隊海軍部隊も同時に——

九月二十三日、独立工兵中隊の鉄舟数隻（彈藥、糧秣を満載）が氾濫水路をたどって今村支隊東側の黄泥湖畔に到着し、補給を実施した。この舟艇は第六師団長の要請に対し、第十一軍司令官が特派したものであった。この舟艇派遣に際しては、第十一軍兼勤の海軍參謀が多大の努力を払い、武穴鎮の海軍部隊が多大の協力をした。

舟艇の帰路を利用して患者の後送が行われた。第六師団が九月二十三日正午ごろ発信した電報は「今村支隊の死傷合計六百八十人」と報告している。

支隊は増援部隊の到着に伴い、二十六日夜から田家鎮要塞の主陣地攻撃を再開したが、歩兵第十三連隊は將校の死傷も多く、戦力は相当低下していた。増援の山本大隊は松山口付近高地、香山を占領して側背援護に任じたが、この方面の敵は依然として増加しつつあった。

歩兵第十三連隊の左第一線の第一大隊は二十六日夜敵陣地を約三_キ突破して二十七日朝魯家山を占領し、右第一線第二（岡山）大隊は二十六日夜敵陣地を約二_キ突破して二十七日朝黒家山を占領した。西大隊の攻撃は潜行、奇襲、強撃の反復によって成功した。

二十七日、池田大隊（増援部隊）は岡山大隊右隊の平地方面の敵を攻撃して多大の損害を与えた。

側背援護の山本大隊は二十七日未明から優勢な敵の人海戦術の攻撃を受けた。多数の死傷者（第二中隊は中隊長以下四十数名に減少）を生じたが、敵の攻撃を阻止した。

二十八日、岡山大隊及び池田大隊は協力して田家鎮要塞の最高峰である玉屏山を占領した。敵は複郭陣地に後退し、二十八日夜から蕪春方面に退却を開始した。九月二十九日、要塞周辺の砲台を占領し、一一・三〇田家鎮に入城した。武穴鎮方面から攻撃前進してきた海軍部隊も同時に入城した。

側背援護の山本大隊は、二十九日も依然来攻する数個師の敵（第三二、四四、一二一、一七一、一七四師等）と激戦をした。同方面の敵の行動は十月一日ごろから消極的となり、十月六日ころには蕪春方面に後退した。

今村支隊の損害は甚大で、第六師団の九月三十日の電報は次のとおり報告している。

現在までに判明せるわが損害は戦死二百八十四、内將校七、戦傷八百六十六、内將校十五、計千百五十



占領大休止、これが兵隊への何よりのプレゼント

なり、なお増加する見込みなり。

第十一軍機密作戦日誌資料には次の記載がある。

当初第六師団ハ歩兵三大隊基幹部隊ヲ以テ今村支隊ヲ編成シ、田家鎮攻略ニ進発セシメタルモ優勢ナル敵ハ蕪春方面及ビ広濟南方ヨリ前進シ、其退路ヲ遮断セリ。ココニ於テ第六師団ハ先ズ歩兵一大隊ヲ以テ増援セシメ、サラニ歩兵一大隊、山砲二中隊ヲ抽出救援セシメ、歩兵一大隊、山砲二中隊ヲ抽出救援ニ赴カシメタリ。当時広濟周辺ノ敵ハ第六師団ノ兵力分散ニ乗ジ撃砲ノ目的ヲ以テ四周ヨリ昼夜ノ別ナク猛烈ナル攻撃ヲ採リ師団自体極メテ苦戦ノ状況ニ在リシモ遂ニ軍ニ増兵ヲ要求スルコトナク自力ヲ以テ田家鎮攻略ヲ断行シタルハ敬服ニ値ス

第十一軍に志摩支隊配属

派遣軍は第十一軍の兵力不足を考慮し、江岸警備に任じている第百十六師団から歩兵第百二十連隊（長・志摩源吉大佐、第一大隊欠）野砲兵第百二十連隊第二大隊、衛生隊三分の一、輜重兵一中隊を抽出して、九月三十日第十一軍に配属した。

第十一軍は、志摩大佐を長として前記部隊をもって志摩支隊を

編成し、田家鎮に進出させ、同地の警備を担任することを命じた。志摩支隊は十月四日、田家鎮の警備を今村支隊から継承した。

今村支隊は田家鎮の警備を交代し、十月六日広済側地区に集結したが、コレラ患者（擬似をふくめ約三千人）が発生したため、防疫処置に追われた。

志摩支隊は十月八日早朝、一部で蕪春城を占領、支隊主力も九日同地に進出して、以後の前進を準備した。

待望の馬頭鎮を攻略

——永井大隊揚子江南岸前進して——

瑞昌西方地区への進攻

第十一軍は八月二十一日、作命第三十四号（既報）で、波田支隊に馬頭鎮の攻略を命じたが、波田支隊の前進は強力な敵の抵抗によって迅速には進展しなかった。海軍の水路啓開作業は、馬頭鎮付近の敵砲兵の射撃によって妨害され、作業中止の状態となり、海軍側から馬頭鎮攻略促進をしばしば第十一軍に要望してきた。また第十一軍自体としても瑞昌北西地区の敵陣地の強化及び敵兵力の瑞昌西方方面への増加の情報などから、瑞昌西方地区の敵に対し、迅速に攻撃を開始する必要があった。

軍は第九師団の攻撃準備、特に馬廻嶺方面からの、丸山支隊の瑞昌地区への招致の関係からして、第九師団及び波田支隊の攻撃開始を九月十日と決定し、九月七日次の攻撃命令を下達した。

軍の作戰構想は瑞昌北西方の敵を爽溪湖南方地区において捕捉しようとするものであった。

第十一軍作命第五十号

一、敵ハ瑞昌北西方及ビ西南方地区ニ陣地ヲ占領シ瑞昌―武寧道方面ニハ数日来敵兵増加ノ状アリ。

二、軍ハ瑞昌北西方地区ノ敵ヲ撃破スルト共ニ海軍ノ水路啓開ニ協力セントス。第六師団ハ近ク一部ヲ以テ田家鎮ヲ攻略スル筈。

三、波田支隊ハ十日馬鞍山、蟻蟻山ノ線ヨリ攻撃ヲ開始シ、当面ノ敵ヲ撃破シテ一挙老屋柯濫付近ニ向イ前進スベシ。攻撃ノ進捗ニ伴イ速ニ一部ヲ以テ富池口付近ニ至ル江岸ノ敵ヲ駆逐シ海軍ノ水路啓開ヲ容易ナラシムベシ。(以下略)

軍は第九師団からの要請により、前記命令の攻撃開始日を九月十一日払暁から瑞昌北西方山岳地帯の敵陣地の攻撃を開始し、同日夕波田支隊は瑞昌北西方約十^キの馬鞍山、敵家山の線に進出し、第九師団の右翼隊(歩兵第十八旅団長青木成一少将の指揮する歩一九。歩三六主力、山砲一大隊基幹)は瑞昌西方約九^キの和尚腦、陳家山、筆架山付近の線に進出した。

第九師団の左翼隊(歩兵第六旅団長丸山政男少将の指揮する歩七主力、山砲二個中隊基幹)は十日から瑞昌南西約七^キの仙女池高地を占領した。

九月十二日、池田支隊の戦闘は有利に進展し、約二^キ進出した。第九師団右翼隊は和尚腦及び太陽業地区の敵陣地を力攻したが、敵の抵抗は頑強で大きな進展はなかった。第九師団左翼隊は仙女池付近の敵を撃破して同地西方地区に進出した。

九月十三日、波田支隊の戦鬪は有利に進展し、夕刻には瑞昌北西約二十^キ付近に進出した。第九師団右翼隊は力攻のすえ、大陽寨などを占領した。

九月十四日、波田支隊主力は馬頭鎮南西約五^キ付近に進出して揚子江南岸沿いに前進した波田支隊の永井大隊は同日、海軍と協同して待望の馬頭鎮を攻略した。

第九師団右翼隊は九月十四日夕、瑞昌西方約十七^キ付近に進出した。第九師団長は左翼隊方面に第二十七師団が進出してくるため、一部を仙女池付近に残置し、左翼隊主力を右翼隊の右側に転進させて右翼隊とし、旧右翼隊を左翼隊とするよう命じた。

波田支隊は九月十五日、馬頭鎮南西約十^キ付近の敵陣地を攻略し、同日夕には老屋柯付近に進出した。軍命令に基づき、池田支隊右翼隊（台湾歩兵第一連隊、永井大隊、山砲一個小隊基幹）は九月十六日から富池口は天險の上、永久築城が設備されており、敵の抵抗は頑強で約一週間力攻して九月二十三日に攻略した。右翼隊は九月二十五日、一部を富池口に残し、主力波田支隊に追及するため、転進した。

第九師団は九月十五日、敵陣地を攻略して西進したが、急速な進攻は困難であった。

夜行軍で瑞昌へ前進

——第二十七師団砲兵は山地作戦向き——

第十一軍の作戦指導の変更

第十一軍は、第二十七師団を星子―虬津衛（德安南西二十^キ）―務箬溪（德安西方四十^キ）道（良道）

を前進する計画で、九月上旬同師団を廬山東麓地区に集結させつつあった。ところが第百一師団の徳安方面に向かう作戦は進捗せず馬廻嶺付近に進出した第百六師団の戦力は極度に低下していた。軍は、第百一、第百六師団をもって徳安方面の戦局を早急に打開することは困難と考え、第二十七師団を徳安方面に投入した場合には、第百一、第百六師団の現況からして、第二十七師団独力の戦闘となり、師団の戦力を減殺するのみならず、作戦が有利に進展した場合においても、第二十七師団の西方転進は十月上旬・中旬になるものと判断した。

軍は、軍主力の西進を促進することが必要なりとし、第二十七師団の編成（山砲師団）も考慮し、悪路ではあるが、第二十七師団を瑞昌方面から箸溪付近に進出させることに決した。また、香口―湖口間の警備を第十六師団と交代した第百一師団の佐枝支隊も、第百一師団の指揮下に復帰させることなく、瑞昌方面から西進させることにした。

九月十日策定した作戦指導要領は次のとおりである。

方針

(一) 軍は江南地区において主力をもって西方に向かう前進を促進すると共に有力なる一部をもって徽安方面の敵に対する攻撃を準備する。

(二) 波田支隊及び第九師団は夾溪南方地区に進出したるあと、機を失せず敵を追撃して木石港南北地区、ついで辛潭鋪東方富水の線に進出し渡河を準備する。

(三) 第二十七師団は十二、十三日出発、兵力を瑞昌付近に集結のあと十七日ごろ行動を起こし、瑞昌―武

寧道に沿う地区を天橋河、箬溪付近に進出し、次の作戦を準備する。

四 第四百六師団は現態勢をもって以後の作戦を準備するとともに二十三日頃以降第二十七師団の前進に策応し、兵力を西方に転移して德安付近の敵を左側より攻撃せしむ。山砲兵第五十二連隊（第三大隊欠）を配置す。

(五) 第四百一師団は前任務を続行せしむ。

(六) 二十五日頃到着を予期すべき佐枝支隊は全部もしくは大部分を第二十七師団に属し箬溪付近に向かい追及せしむ。

第二十七師団の戦闘加入

第二十七師団は八月末から九江南東方地区に集結を開始し、九月八日ごろには大部分の集結を終わった。軍は九月十一日、呂集作命第五十七号（略）を発し、第二十七師団に箬溪進出を命じた。

第二十七師団は夜行軍をもって瑞昌付近に向かい前進を開始し、九月十四日朝、先遣隊は瑞昌南西方地区に、師団主力は瑞昌東方地区に進出した。

第二十七師団は昭和十三年七月末、支那駐屯兵团を基幹として編成された、いわゆる「三単位師団」で、師団砲兵は山砲連隊であつて山地作戦に適した。師団の編成概要は次の通り。

第二十七師団司令部――師団長本間雅晴中将

第二十七歩兵团司令部――歩兵团長永見俊徳少将

支那駐屯歩兵第一連隊――連隊長谷川基大佐

同第二連隊〓岡崎清三郎大佐

同第三連隊〓宮崎富雄大佐

第二十七師団搜索隊〓隊長宮脇侃藏中佐

山砲兵第二十七連隊〓連隊長小林信夫大佐

工兵第二十七連隊〓連隊長小川三郎中佐

輜重兵第二十七連隊〓連隊長石川鉞郎大佐

第二十七師団通信隊、同衛生隊、同第一〓第四野戦病院

武漢地方の要地攻略

——中支那派遣軍 第十一軍に命令下す——

派遣軍は九月六日、第二軍の大別山突破と信陽方面進出を下令したが、九月十二日第十一軍に対し次の命令を下した。

中支作戦甲第八十七号

中支那派遣軍命令（九月十二日南京軍司令部）

一、第十一軍の集中はおおむね完了し、第二軍の作戦もまた有利に進展中なり。

二、軍は大別山北麓方面の作戦と相まって揚子江方面よりする作戦を進め、漢口を攻略せんとす。

三、第十一軍は各一部をもって揚子江上及びその北岸地区より主力をもって同南岸地区より前進し、武

漢地方要地を攻略すると共におおむね咸寧（武昌南南々西七十キ）蒲圻（咸南西四十キ）付近粵漢鐵道の線に進出すべし。南濤鐵道方面の敵に対しては一部をもって軍の左側を援護せしむべし。粵漢線に進出後岳州付近を占領し得るの準備にあるべし。揚子江に沿う作戰は海軍と協同すべし。

四、第二軍及び航空兵団は前任務を続行すべし。

五、武漢三鎮への直接進入は別命す。

六、中支那碇泊場監は揚子江上における作戰参与のため一部の船舶關係部隊を指揮し、第十一軍司令官の指揮下に入るべし。細項に関しては參謀長をして指示せしむ。

七、予は南京軍司令部にあり。

中支那派遣軍司令官 畑 俊六

中支那作命第八十七号に基づく參謀長の指示

一、揚子江に沿う作戰のため第十一軍司令官の指揮下に入るべき船舶關係部隊、人員及び資材は次のごとし。

中支那碇泊場監及び同監部の一部、第二十碇泊場司令部、北尾碇泊場司令部、独立工兵第六連隊（一中隊欠）同十連隊（同）大発動艇約百隻、小発動艇約百八十隻。

二、中支那碇泊場監及び同監部の一部、第二十碇泊場司令部、北尾碇泊場司令部、独立工兵第六連隊（一中隊欠）同十連隊（同）大発動艇約百十隻、小発動艇約百八十隻。

三、中支那碇泊場監部は前項作戰間、依然揚子江内の船舶輸送業務を担任するものとす。このため蕪湖

より上流における前項以外の船舶輸送機関の行動は中支那作命甲第三六号にかかわらず中支那派遣軍の指揮を受けるものとする。

四、裕溪鎮（蕪湖北西二十五キロ）廬州間の水路輸送は次記に準拠し第二軍司令官の指揮下に実施せしむるものとす。

九月二十五日頃迄 現状の通り。

九月二十五日頃以後 重量約三百ト

十月五日頃以降 逐次撤収

中支那派遣軍参謀長 河辺正三

第十一軍の武漢攻略命令

第十一軍は既報の派遣軍命令を受領し、九月二十三日次の命令を下達した。第十一軍機密作戦日誌資料は次のように記述している。

軍は中支作命甲第八十七号をもって武漢攻略に関する命令を受領せしも軍の作戦は集中、機動、会戦の一般段階を踏むことなく、上陸作戦をもって作戦を開始し、以後集中と戦闘との交錯連続なる実情をもつて、武漢攻略の一般任務を下達すべき時機なかりしか。九月中旬をもってほとんど全部の集中を完結せしめて、ここを武漢攻略の任務に基づく企画を命令として一般に明示せり。

第十一軍作命第七十六号

第十一軍命令（於九江）

一、中支那派遣軍は武漢地方要地を攻略するとともに随所、所在の敵を撃滅し、敵の繼戦意志挫折を企図す。第二軍は既に光州、商城を攻略し、第十三、第十六兩師団をもって大別山山系を突破し、麻城南方地区に、爾余をもって信陽方向に向かう前進を準備しあり。

軍の集中はおおむね完了し、当面の戦機まさに動かんとしつつあり、航空兵団は主力をもって軍の作戦に協力す。支那方面艦隊は第三艦隊及び航空部隊をもって軍の遡江作戦に協力す。中支那碇泊場監は一部の船舶関係部隊を指揮して予の指揮下に入らしめる。

二、軍は随所に敵を撃破して武漢地方要地を攻略すると共に、岳州付近より咸寧西方にわたる揚子江岸に進出せんとす。

三、各師団及び各支隊はそれぞれ現任務を続行すべし。

四、軍と第二軍間の作戦境地を天望山、英山、羅田、道観河、柳子港を連ねる線に延伸せらる。線上は当軍に属する。

五、溯江船舶隊は揚子江に沿う作戦の進展に伴い所要兵団の作戦に協力すべし。また長江及び鄱陽湖に沿う軍の補給輸送に任すべし。

六、予は九江集団司令部にあり。

第十一軍司令官 岡村寧次

五個師団を中心に

——第十一軍の陣要を紹介——

第十一軍の陣要を以下紹介しよう。

▽第六師団（配属部隊） 独立機関銃第七大隊（第二中隊欠） 独立軽装甲車第九中隊、戦車第五大隊の一個中隊及び同大隊段列の一部、独立山砲兵第二連隊、迫撃第四大隊（第三中隊欠） 近衛師団第四野戦高射砲隊、独立工兵第十二連隊（第三中隊欠） 無線電信第五十六小隊、第一野戦測量隊の一個班、第十一師団第一、第二架橋材料中隊、近衛師団渡河、材料中隊、兵たん自動車第九、第十、第十二、第六十九中隊、第八防疫給水部、臨時衛生隊第一班。

▽津田支隊（配属部隊） 独立機関銃第七大隊第二中隊、独立軽装甲車第八中隊、野戦重砲兵第十連隊、迫撃第四大隊第二中隊、独立工兵第三連隊第二中隊、無線電信第四十八小隊、第一師団渡河材料中隊の一個小隊、第二師団第五兵たん輜重兵中隊、第十一師団第五兵たん輜兵中隊、第九防疫給水部の約半分。

▽第九師団（配属部隊） 独立機関銃第八大隊、野砲兵第百六連隊第三大隊及び同連隊段列三分の一、迫撃第一大隊第二中隊及び大隊段列三分の一、独立工兵第二連隊、無線電信第五十七小隊、第一師団渡河材料中隊、第十六師団第一渡河材料中隊、第四防疫給水部。

▽第二十七師団（配属部隊） 独立軽装甲車第六中隊、独立工兵第十二連隊第三中隊、無線電信第四十四小隊、第一野戦測量隊の一個班、第二師団第四兵たん輜重兵中隊、第三師団第二兵たん輜重兵中隊、第八

師団第一兵たん輜重兵中隊、兵たん自動車第七十中隊、第五防疫給水部。

▽第百六師団（欠除部隊）野砲兵第百六連隊第三大隊及び同連隊段列三分の一。

（配属部隊）山砲兵第五十二連隊（第三大隊欠）迫撃第一大隊第三中隊及び同大隊段列三分の一、無線電信第五十八小隊、第二師団第六兵たん輜重兵中隊、第十一師団第一兵たん輜重兵中隊、第六防疫給水部。

▽第百一師団（欠除部隊）佐枝支隊（配属部隊）戦車第五大隊の一中隊及び同大隊段列の一部、野戦重砲兵第十三連隊及び同旅団輜重の一部、野戦重砲兵第十連隊第三中隊及び同連隊段列の一部、迫撃第一大隊第一中隊及び同大隊段列（三分の二欠）近衛師団第一野戦高射砲隊、無線電信第四十五小隊、兵たん自動車第十一中隊の半個小隊、第六防疫給水部の半分。

（佐枝支隊）長・佐枝義重陸軍少将、歩兵第二旅団（歩兵第百五十七連隊欠）騎兵第百一大隊の一個小隊、野砲兵第百一連隊第五、第八中隊、工兵第百一連隊の一個小隊、第百一師団通信隊の一部、同衛生隊三分の一、同第三野戦病院、輜重兵第百一連隊の一個中隊、兵たん自動車第十一中隊の半個小隊、第五防疫給水部の約半分。

（遡江船舶隊）長・片村四八陸軍少将、中支那碇泊場監部の一部、北尾碇泊場司令部、独立工兵第六連隊（一個中隊欠）大発動艇約百十隻、小発動艇約百八十隻、その他所要の部隊・人員及び器材。

（軍直轄部隊）戦車第五大隊（一中隊と大隊段列の一部欠）野戦重砲兵第六旅団、迫撃第一大隊本部（九江高射砲隊）長・西田通久陸軍砲兵中佐、配属部隊名略。（軍工兵隊）長・山田茂陸軍工兵大佐、配属部隊名略。

(第三通信隊主力) 野戦砲第十八小隊。

(第一野戦測量隊)

(軍鉄道隊) 長・落合正次陸軍工兵少佐、鉄道第一連隊第四大隊(一個小隊欠) 第十師団第九陸上輸送部(一個分隊欠) 鉄道派遣団の一部。

(第十一師団第一架橋材料中隊) の一部、第九防疫給水部、防疫給水部支部。

容易でない敵陣突破

——軍、氣勢高揚さす追撃命令——

富水に向かう追撃

前述の陣容をもって漢口遡江作戦はすめられ、主に江岸敵前上陸要地占領を使命とした。

瑞昌北西方の敵陣地を攻撃中の波田支隊は九月十五日夕、老屋柯に進出し、第九師団は老屋柯南方山岳地帯の数線の敵陣地を攻撃中であつた。

第二十七師団は九月十五日、瑞昌南方に進出し、同日夕には瑞昌南々西約十^キ付近の敵陣地(胡家嶺、云車嶺)を攻略して横港灣方面への攻撃前進を準備した。

軍は九月十五日、第二十七師団の要請により、仙女池付近に所在した第九師団配属の野砲兵第百六連隊第三大隊及び野戦重砲兵第十連隊第一大隊(第三中隊欠)などを一時的に第二十七師団に配属した。現実の問題として、野砲及び重砲は山地帯内で作戦中の第九師団への追隨は困難でもあつた。

軍は第九師団及び波田支隊の瑞昌北西方地区への攻撃開始以来、敵から得た情報により、当面の敵は相当打撃を受けて退却しつつあることは明らかで、この方面は特に敵の予期しない方面で湯恩伯は急拠瑞昌―武寧道方面から兵力を転用してわが西進を阻止しようとしており、その指揮は錯乱している兆候があると判断した。

軍は敵が山岳を利用して逐次防御を実施し、軍が希望するような迅速果敢な追撃は期待し得ないかも知れないが、両師団の氣勢を高揚させることも考え、九月十五日次の追撃命令を下達した。

第十一軍作命第六十四号

一、第九師団及び波田支隊当面の敵は湯恩伯配下の直系第五十二、第十三、第八十五軍にしてわが連日の攻撃により、その主力は既に撃破せられ、陽新及び辛潭舗方向に退却中なるものとす。諸情報を総合するに敵の志気は著しく喪失、湯恩伯軍の指揮は錯乱の徴歴然たるものあり。第二十七師団は明十六日攻撃を開始し、瑞昌―箬溪道に沿う地区付近に向かい前進す。

二、軍は辛潭舗付近より下流、富水の線に向かい敵を追撃せんとす。

三、波田支隊は所在の敵を撃破しつつ老屋柯、木石港、陳家祠（木石港西北方十キロ）冷水坑に沿う地区を経て富水に向かい追撃すべし。特に一部をもって速やかに富池口付近に進出し、海軍の水路啓開を容易ならしむと共に第六師団一部の田家鎮付近攻略に協力せしむるべし。また追撃の進展に伴い、別に一部をもって楊林舗（陽新対岸）付近に進出し、陽新方面に対する陽動にまかせしむべし。

四、第九師団は所在の敵を撃破しつつ陽新道南方地区を経て木石港―下盆―下橋舗―排子道方面より富

水に向かい追撃すべし。有力なる一部をもって霧嶺山、三聖山（ともに木石港南方六キ）南麓を経て龍港（辛潭舗南方約十キ）付近に突進し、辛潭舗―箬溪道を遮断せしむべし。

野戦重砲兵第十連隊（第一大隊、第四中隊及び連隊段列の一部欠）を波田支隊に、第四師団架橋材料中隊を独立工兵第三連隊に転属すべし。瑞昌南方地区にある一部は暫く現任務を続行すべし。

五、波田支隊及び第九師団は富水河畔に進出せば、機を失せず二部をもって対岸に地歩を獲得することに努むべし。

六、（作戦地境）

七、（道路補修）略。

軍は以上のごとく追撃命令を下令したが、第一線特に第九師団方面は標高七百呎前後の山岳地帯に設けられた数線の敵陣地を突破することは容易でなかった。

主力、辛潭舗へ前進

——第二十七師団、佐枝支隊を配下に——

第二十七師団は九月十六日、第三航空団の協力のもとに瑞昌南西方約九キ付近から攻撃を開始し、夕刻には楊家寨（瑞昌南西十二キ）付近に進出、十七日には馮家舗（瑞昌南西二十キ）西方に進出した。

波田支隊及び第九師団は頑強な敵の抵抗を受け、戦況は大きな進展をみなかった。

軍は九月十七日、第九師団配属の独立軽装甲車第八中隊及び野戦重砲第十連隊第一大隊（第三中隊欠）

を波田支隊に配属替えを下令した。

波田支隊主力は逐次敵陣地を攻略し九月二十二日夕、木石港（陽新南東十^キ）付近に進出し、二十三日には陽新対岸に進出した。

第九師団はしゅん陰重壘の山岳陣地を力攻して九月二十二日、木石港南東地区に進出し、二十三日から排市（陽新南南西二十五^キ）及び辛潭鋪（陽新南西三十^キ）付近富水河に向かって追撃に移り、所在の敵を撃破して十月二日排市南東側高地に進出した。師団の背後及び左側には多数の敵が残存しており、師団はこれらの敵を攻撃しつつ富水河の渡河を準備した。

第二十七師団は所在の敵を撃破しつつ南西進し、九月十九日横港（瑞昌南西三十^キ）付近に、二十四日小坳（瑞昌南西三十五^キ）地区に進出した。

軍は九月二十四日、第二十七師団に対し、箬溪、天橋（箬溪北西十五^キ）付近に進出後は速やかに辛潭鋪方向に向かう準備をし、有力な一部を辛潭鋪方向に先遣して敵の退路を遮断することを命じた。また佐枝支隊を同師団に配属した。

佐枝支隊（歩兵第二百二旅団長佐枝義重少将の指揮する歩兵第二百二旅団、騎兵第一百大隊の一個小隊、野砲兵百一連隊第五、第八中隊基幹）は九月二十五日、九江を出発し、主力二十九日、大屋田村に到着して第二十七師団長の指揮下に入った。

第二十七師団は九月二十五日朝から、大屋田村南西方高地及び白水街付近の敵陣地の攻撃を開始したが、敵の抵抗は頑強であり、敵兵力は逐次増加しつつあった。師団は二十八日、白水街方面の攻撃を中止し、

主力を大屋田村南西方高地の攻撃に集中する部署をとった。

一方、軍は二十八日、徳安西方に進出させる第百六師団の補給路として、第二十七師団に対し、白水街の確保を要望したが、第二十七師団は目下の状況から天橋河―箬溪の線に進出後にしたい旨を回答した。

第二十七師団は攻撃を続行し、十月一日天橋河付近に進出し、十月五日未明箬溪を占領した。さらに六日、先遣隊（支那駐とん歩兵第三連隊、山砲一個大隊基幹）を辛潭舗方面に派遣し、師団主力は箬溪、天橋河、大屋田地区に兵力を集結して、前進を準備した。先遣隊は六日午後五時、金水村、天水村（天橋河北西十六き）を通過し、西進した。その箬溪地区に佐枝支隊及び歩兵約一個大隊を残置して主力は七日から辛潭舗に向かい前進した。

難航極める第百六師団

——五台嶺突破に着手、山岳地形、煙霧に悩む——

第百六師団は九月三日、馬廻嶺に進出し、同地付近の警備に任ずるとともに、戦力の回復に努力した。軍は第百六師団の戦力回復に特別の配慮を払い、教育訓練等を実施した。また作戦地の状況から山砲兵部隊の必要を痛感し、八月上旬派遣軍に対し、山砲兵部隊の配備を要望した。そこで派遣軍は第十一軍の要望をいれ、第十七師団の山砲兵第五十二連隊と第十一軍に配属することに決した。

それを受けた山砲兵第五十二連隊（第三大隊欠）は九月九日から逐次九江に上陸して軍の指揮下に入った。軍は九月十四日、その作戦地が山岳地帯である第百六師団に、山砲兵連隊を配属して同師団の戦力増

強を図った。

一方第百一師団は九月中旬、廬山南東麓の隘口街北方地区の敵陣地を攻撃中であつたが、敵の抵抗は頑強で戦況の進展は遅々としていた。

敵は当初、徳安周辺に三十数個師を集中していたが、波田支隊、第九、第二十七師団等の瑞昌西方への進出に伴い、逐次兵力を箬溪方面に転用し、徳安方面の敵兵力を漸減しつつあることが明らかになった。しかし第百一師団に対する敵の抵抗度からして、相当の兵力がなお所在するものとみえた。

軍は第百六師団の戦力回復状況と第二十七師団の箬溪方面への進出を迅速にするため、第百六師団を徳安南西方地区に進出させることを決心し、九月二十日次の軍命令を下達した。

第十一軍作命第七十一号

一、敵は徳安方面より兵力を箬溪方面に転用しつつあるものごとし。

二、軍は徳安周辺の敵を撃破せんとす。

三、第百六師団は適時行動を起こし、五台嶺付近において敵陣を突破し、速やかに徳安西南方地区に進出して徳安周辺の敵を側背より攻撃すべし。一部を曹家坂、馬廻嶺付近に残置し、同地区付近を確保せしむべし。攻撃準備のため特に企図秘匿に努むべし。

四、第百一師団は当面の敵を撃破し、徳安付近に進出すべし。攻撃開始の時期は別命す。

五、野戦重砲兵第六旅団は野戦重砲兵第十三連隊を西孤嶺（星子西方十^キ付近）にいたり、第百一師団長の指揮下に入らしむべし。

軍が、第百六師団と馬廻嶺から直路徳安方面に南下させなかったのは、徳安北方の敵既設陣地の攻撃を避けるためであり、第百一師団の攻撃開始を規制したのは同師団に配属（九月二十日）した野戦重砲兵第十三連隊の戦闘参加を考慮したためであった。

そして軍は九月二十三日、第百一師団の攻撃開始を九月二十六日と下命した。第百六師団の情報主任参謀が病氣欠員となっており、軍の企図する作戰の実行を容易にするため、第十一軍参謀桜井鐐三中佐を同師団に配属して戦力の増強を図った。

第百六師団は山岳作戰に適するように所要部隊を駄馬編成に臨時改編、同師団に山砲兵第五十二連隊が配属されたことは既述の通りだが、補充員は九月下旬、九江に逐次到着中であつた。

九月二十五日、馬廻嶺地区から西進を開始、五台嶺の突破に着手したが、進路はダ馬さえ通過困難な所が多く、前進は難航を極め、地形の複雑さと地図の不正確、夜間行動、煙霧などから、自隊の位置も確認出来ず、師団内の各部隊間の連絡もとだえがちであつた。

第百六師団は九月二十七日、軍に対し次のように報告した。

師団は常に右方向より敵の射撃を受けつつ正午梁山（白水街東方十二キ）付近と覚ゆる地点に進出し、新たに現出せる敵と對戦中なり。

また三十日次のように報告した。

師団主力方面は右側方より迫れる敵第九十師、第九十一師の混合部隊と交戦中にしてその大部を撃退し、目下（前十時四十分）揚海山（白槎街北方約八キ）南方水修一箬溪道を切斷するため前進を準備中なり。

第六百師団の後方連絡線は二十八日ごろから途絶しており、天候不良で飛行機偵察も補給も出来なかった。

高品支隊、悪路を克服

——石灰窯、黄石港を占領——

この詳報は第五十一連隊の項に譲るが、概要は次のごとくである。

派遣軍は第十一軍の兵力不足を補うため、九月三十日第六百十六師団の志摩支隊（田家鎮方面派遣）及び高品支隊（第十五師団の歩兵第六十連隊長高品彪大佐の指揮する歩兵第六十連隊第一大隊、同歩兵砲隊主力、歩兵第六十七連隊第三大隊、歩兵第五十一連隊第三大隊（二個中隊欠）、野砲兵第二十一連隊第一大隊（第三中隊欠）、工兵第十五連隊第二中隊（一個小隊欠）を第十一軍に配属、また十月四日鈴木支隊を配属した。

さらに十月九日、派遣軍は第六百十六師団主力の派遣を命じたが、同師団警備地域で敵のゲリラ活動が活発となったため、歩兵第六十九旅団長石原常太郎少将の指揮する歩兵二個大隊のみを派遣して第十一軍に配属した。

軍は十月六日、高品支隊（同日から逐次九江到着）に対し、半壁山付近に上陸し、海軍と協力してまず黄陂口（田家鎮北西十キ）付近にいたる江岸付近の敵駆逐を命じた。また波田支隊の馬鞍山（半壁山西側）方面の部隊（台湾歩兵第一連隊の秋富大隊主力基幹、十月四日半壁山攻略、十月五日馬鞍山攻略）を高品

支隊に配属した。

高品支隊は十月十二日未明、海軍と協力して津源口（石灰窑下流二十キ）に奇襲上陸し、石灰窑に向かつて前進を開始した。高品支隊配属の、波田支隊秋富大隊は馬鞍山で配属を解かれて波田支隊に復帰した。

高品支隊は悪路を克服し、山地によって抵抗する敵を逐次撃破して十月十七日石灰窑を占領した。同日海軍陸戦隊も江上から石灰窑に上陸した。ついで十九日、高品支隊の一部は海軍と協力して黄石港を占領した。軍は二十日、高品支隊に鄂城付近への追撃を命じた。

高品支隊は江岸に沿う地区を追撃し、二十二日海軍陸戦隊と協同して鄂城を攻略した。このころ波田支隊は二十一日大冶を攻略し、鄂城方面に北進中であつた。

軍は二十二日、高品支隊に対し、葛店付近への進出と同支隊の歩兵一個大隊を遡江船舶隊長に配属することを命ずると共に、波田支隊が鄂城以北に進出後、高品支隊は波田支隊長の指揮下に入ることを下令した。高品支隊は二十三日、葛店に向かい追撃中に波田支隊長の指揮下に入った。

第一百十六師団の第二百十連隊福知山編成志摩支隊は十月八日蕪春を占領し、軍命令により黄白城（蕪春北々西十八キ）付近への前進を準備した。

志摩支隊は十二日、江上機動によって小乱泥灘（蕪春北西十六キ）付近に上陸し、十四日には茅山及び黄白城南方に進出した。この日石原常太郎少将は小乱泥灘に上陸し、志摩支隊を合せ指揮して石原支隊（歩兵四個大隊、野砲一個大隊基幹）を編成した。

軍は十九日石原支隊に対し、浠水北岸地区へ進出して第六師団の進出に協力することを命じ、二十日に

は黃州（團風）進出を下令した。

石原支隊は敵を撃破して二十一日蘭溪鎮を攻略し、江上機動を準備した。二十四日江上機動により黃州を越えて、支隊主力は陽邏下流に上陸し、二十五日一部で陽邏を占領した。

軍は二十四日、石原支隊に漢口東側地区への進出を命じた。このころ第六師団は漢口に迫りつつあった。

敵反撃に痛手大きく

——第六師団 戦力補充し前進急ぐ——

石原支隊は陸路漢口に前進し、十月二十八日支隊主力は漢口北東地区に集結した。十月二十六日の派遣軍命令により、十月二十八日第十一軍から第二軍の指揮下に転属し、武陽に集結して一部をもって漢川及び黃陵磯などを占領した。

第六師団は九月六日広済の占領以来、連日連夜のごとく敵の反撃（十月五日ごろからやや緩和）を受けた。この間、田家鎮要塞の攻略も実施し、多くの死傷を生じ、戦力の回復は容易でなかった。

師団は十月二十五日ごろ到着予定の約三十人の補充を合わせて一挙に漢口に前進することを企図していた。

派遣軍及び第十一軍首脳は、漢口攻略の遅延を焦慮しつつあって第二軍との関係も考慮し、第十一軍は十月十日、第六師団に対し「全般ノ戦局ニ鑑ミ十月五日頃以降成ルベク速カニ行動ヲ開始シ先ヅ蕪水河ノ線ニ向イ前進スルゴトク準備ヲ進メラレタシ」と電報した。

第十一軍司令官（池谷參謀隨行）は十月十一、十二の兩日にわたり、広済の第六師団司令部を訪れて実情を視察し、第六師団は一部をもって十月十七日、主力をもって十八日、それぞれ攻撃前進することを決定した。

第十一軍作命第百三号（抜粋）

一、広済周辺の敵はその兵力の大部を西北方に移動せるものごとく広済方面の敵兵力は十個師内外と判断せらる。第二軍の右翼方面は既に信陽を攻略し京漢線に沿う南進を企図し、第十六、第十三師団は沙窩、新店付近において当面の敵陣地を攻撃中なり。

二、第六師団はなるべく速やかに行動を開始し、当面の敵を撃破して広済―蕪水道に沿う地区をまず蕪水の線に向かい前進し、爾後の攻撃を準備すべし。

第六師団の牛島支隊（歩兵第三十六旅団、独立機関銃第七大隊、野砲兵第六連隊主力、独立山砲兵第二連隊主力、工兵第六連隊主力基幹）は十月十七日払暁から、松揚橋（広済西方五^キ）―西河駅―蕪水道に沿う地区を攻撃前進した。

広済西方及び北方の敵主力は十七日朝から蕪水方面に退却を開始し、本道（広済―漕家鎮）地区の敵陣地には依然守備兵が所在していたが、十七日夜には退却すると判断された。

牛島支隊は所在の敵を撃破し十七日夜、七里橋（広済西北西十五^キ）付近に進出した。牛島支隊は一部をもって夜間追撃を実施し、十八日早朝から主力をもって追撃を開始し、西河駅付近の敵を突破して同日夜、界嶺（蕪水南東二十^キ）前方に進出した。